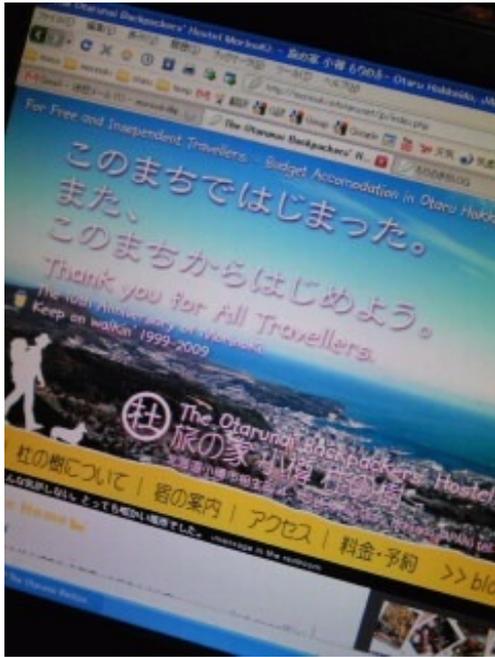




10 Years After



宿のサイトのトップページの画像を秋バージョン（10周年バージョン）に替えました。

明日から9月。

9月は杜の樹10周年の月です。

ななななんと、杜の樹は10年間も小樽で宿をやらせていただいております。

旅人のみなさまに、
友人知人のみなさまに、
ご近所のみなさまに、
家族のみんなに、
改めまして、
心より感謝
申し上げます。

本当にありがとうございます。

宿帳は、開宿の時に大きなノートを買って使っておりますが、すでに半分（弱？）埋まっています。

ある意味、折り返し地点にさしかかったのかもしれない。

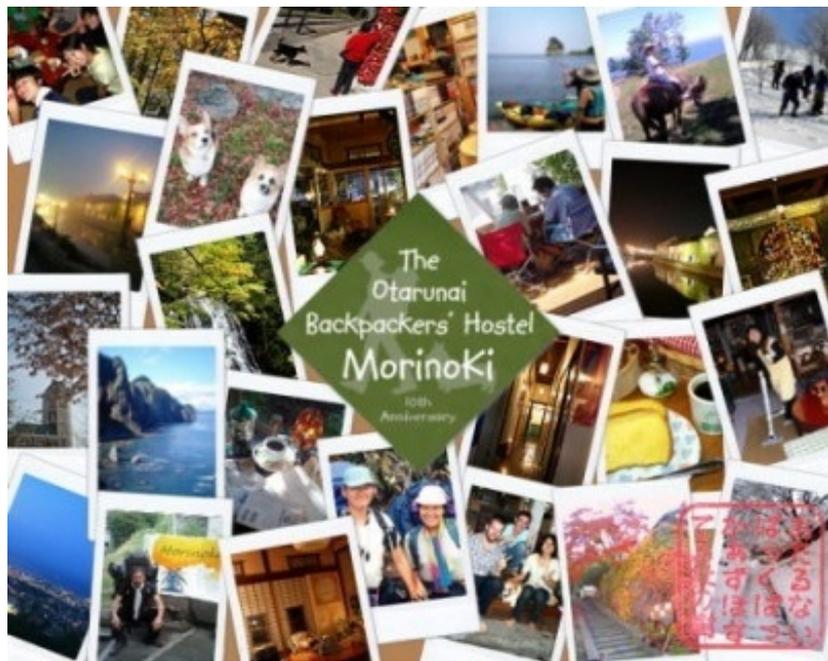
10年も続けてこれというのは、
なんとも奇跡に近い気がします。

飽きっぽい性格なので・・・

これからも精進し、
旅にとのことを第一に思い、
もうしばらく宿を続けていきたいと思いますので、
叱咤激励ご指導よろしくお願い致します。

お近くにお越しの際は、
ふらりと遊びに来て下さい。

すべての旅人に
旅の安全と
旅の醍醐味を！



この9月は、10周年を記念して(?) [「杜の樹回顧録“Keep on walkin' 1999-2009”](#)を毎日連載(予定。すいません予定です。毎日かどうか・・・心配ですが・・・)

あまり期待しないで、気が向いたらお読みください。

なおタイトルは、映画や本、マンガ、音楽などのタイトルを付けています。いくつわかりますか?
(これも心配です。ネタが尽きないのか?)

10周年記念は、9/21から9/23までの[「ハンカク祭」](#)から始まります。

9/22は、杜の樹お誕生会パーティですので、気軽にお越しください。

そして、9/24からは・・・

大感謝ロングラン企画で、年末近くまで、**200円キャッシュバック!**で1泊素泊まり**3,000円**になります。(じゃらんネットなどからの予約も200円キャッシュバックです)

で、その上、[公式ホームページからのネット予約](#)あるいは電話予約(「杜の樹のホームページを見ました。」と言ってください)で、現金払いに限り、さらに200円キャッシュバック!(つまり**2,800円** これは宿を始める前に考えていた理想の金額です。)

詳しくは、もうしばらくお待ちください。

[ホームページ](#)やこのblogでお知らせ致します。

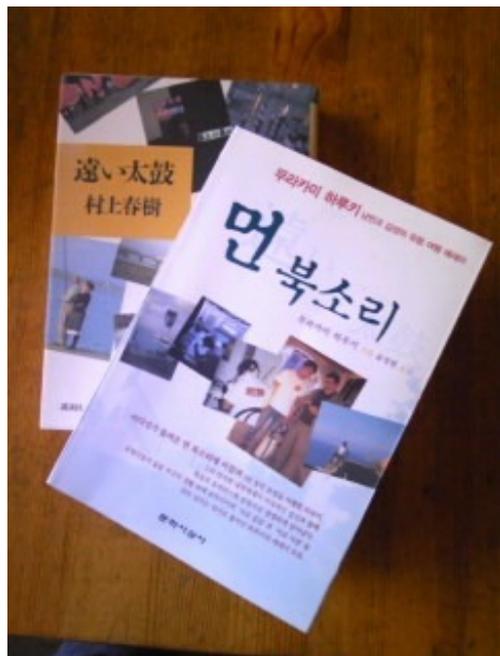
※もうすでに予約してあるかも、割引対象になりますので、ご安心を。

※これは、去年も行った価格調査の一環で、もし、ある程度の成果が上がれば、料金値下げもあり得ます。

「10 Years After」音楽：福耳

2009.08.31 Mon

遠い太鼓



「遠い太鼓に誘われて
私は長い旅に出た」

村上春樹著「遠い太鼓」の冒頭に記されているトルコの古い歌がある。

[韓国から来ているヘルパーのミンさん](#)が、韓国語に訳された「遠い太鼓」を読んでいた、僕もまたつい、ページを紐解いてしまった。まだ棚に積み重ねられているだけの本があるというのに。

物語から目を離すと、不意に斜め右上あたりに疑問が浮かんだ。

「長い旅」とは、どのくらいを言うのだろうか？

11年？

3年？

1ヶ月と16日？

1週間？

3泊4日??

5時間？

その旅の内容やその人の思いでそれは違うのだろう。

時間という単位の問題ではないのだ。



初めての一人旅ではないが、18の時に旅に出た。

ひたすら「南へ」

もう四半世紀も前の話だ。

どこまで？

いつまで？

何を得るまで？

全くそんなことは考えてなかった。

いつまでも。

どこまでも。

全てを。

貪欲だった。

旅の出ようとした理由は、いろいろありすぎてひと言では語れないが、どれもくだらないものばかりだった。すでにどこかの犬に喰われてしまった。

今では「自分捜しの旅」と言われそうだが、

そんなモンではない。

「自分は自分の中にいる」ことは知っていたし、

道に迷ったとか、

ここじゃないどこかへ行こうとか、

そんな哲学的な話ではない。

どちらかというと、物理学的であり、力学的である。

ひたすら南へ！

地図で言うなら「下へ！自由落下！Free Fall！」

そんな単純なことだった。

18の世間知らず、恥知らずが、旅をして、
いろんなコトを知った。
いろんな人に逢った。
いろんなモノを見た。
いろんなものを食べ飲のんだ。
そして、いろいろなモノを理解した。

デジカメもなければ、携帯も、パソコンもない時代だった。
カメラは持っていたものの、フィルムが買えなかった。
喰うモノを買う金に困って、途中で売ってしまった。
記憶は、頭ではなく胸に刻まれた。
写真のように色褪せていき、消えていく。

なんかそれでいいような気がする。

遠い太鼓の音が響いている。
どこからだろうか？
何をしているのだろうか？
誰が叩いているのだろうか？

それらを全て知りたくて、旅をする。

「遠い太鼓」の最後にこう書かれていた。

「そして僕は何処にでも行けるし、何処にも行けないのだ。」

太鼓の音は、今も響いている。
僕はあ那个时候からここで旅をしているのだ。

「遠い太鼓」書籍：村上春樹

STAND ALONE COMPLEX



ニュージーランドから帰ってきたとき、僕は仕事もなく、住む家もなく、カネもなく、ただ30才になっていた。1996年のことだ。

以前していた仕事に戻るつもりはなかったし、漠然と「宿をやろう！」と思っていた。

かみさんはすぐに仕事を始め、僕らは親の家で世話になっていた。

とりあえず、僕はニュージーランドで過ごした手記をまとめはじめた。小樽と札幌のタウン誌に連載していた話を元に一冊の本を作ろうとしていた。[それは運良く、とある出版社の賞を獲得し、出版してもらえることになった。](#)

実に運のいい話だ。

それと並行に、日本語教師の資格も取った。それは、次ぎにまた旅に出る種の手段であったが、未だそれは実行されていない。

さらに、その合間を縫って、宿を作るための情報集めと物件探しをした。

僕は、北海道の宿事情を全く知らない。

キャンプなどで北海道は旅したが、宿屋は全くと言って泊まったことはなかった。

同業種の知人もいない。

友人知人親戚家族に至まで、宿屋だけでなくお店を経営している人はほとんどいなかった。相談相手は、かみさんだけだった。

とある宿のネットワークに2度手紙を書いたが、返事はなかった。

お金もほとんど無かった。

借りるにしても、定職もなく、信用もなかった。

ただ、ニュージーランドで描いた臆気な青写真だけだった。

僕は、孤立状態だった。

それが居心地が悪いとか、さびしいとは思わなかった。

基本はいつも一人旅だ。

そう思うと、別に今の状態が苦ではなかった。

たまたま、元実家の隣に程よい物件を見つけた。

これも偶然と言えば偶然。

そこから加速度的に宿屋作りが始まった。

ほとんど一人でいろいろ調べた。

アドバイスを聞ける人はあまりいなかったし、手段もほとんど無かった。

先の宿屋のネットワークにメールを書いて、参加方法を尋ねた。

でもやはり返事はなかった。

依然、僕はほとんど繋がりのない状態だった。

じゃあ・・・一人で何処まで出来るかわからないが、やってみよう！（実際にはかみさんと二人だが、かみさんはかみさんで仕事を持っているので、仕事としては一人のようなモノだ。）

そう決意した。

宿屋の宣伝も、以前の仕事のコネクションを使えば、それなりにできたであろうが、僕はそれを拒絶した。

僕はとある試みをする。

口コミとネットだけで宿屋をはじめてみよう。

それから10年経った。

入口はいつも開けっ放し状態だ。

いろいろな人が入ってきては、出て行く。

そうこうしているうちに、いろいろな人や宿と繋がりができてきた。

でも、今も基本姿勢は変わらない。

何処にも属さず、誰とでも協力する。

（とはいうものの、いくつかの団体には所属するようになった。でも、気持ちは変わらない）

僕は「一人旅」をしている。

一人旅の複合体が宿屋で、その旅人がラインのように宿屋をつなげていく。

あたかも巨大なネットワークのように。

旅人は自由である。

そんな自由の旅人を受け入れる宿屋もまた自由な存在でなければ、自由な旅を提供できない。

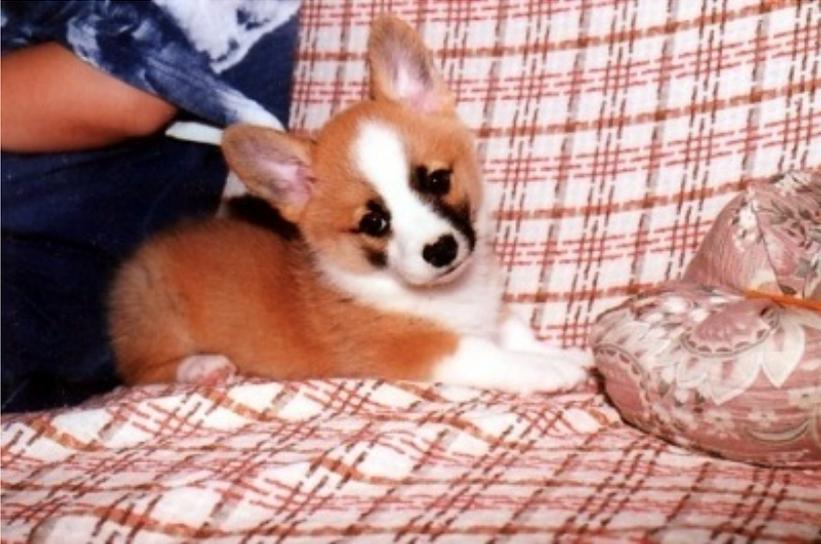
そんな宿を作ろうと未だに試行錯誤している。



(1999年冬 杜の樹にて)

「STAND ALONE COMPLEX」 アニメ：攻殻機動体

2009.09.02 Wed



犬を飼おう！

そう決めたのは、いったいつのことだったのか、今となってははっきり覚えていないが、飼う犬の名前は、支笏湖でキャンプをしているときにすでに決まっていた。

「ペグ」

テントを設営するときを使うくいのことだ。

いろいろな名前の候補は上がった。

ハーケン、スタン、コッヘル、タープ、パドル、ケルン……

どうも強そうな犬の名前ばかりで、かみさんのOKが出ない。

「じゃあ、ペグでいいじゃん」と、テントを畳んでいて投げ捨てるように言った。

ペグと出逢ったのは、近所のペットショップ。

散歩途中で、目に留まった。

すぐさまかみさんに伝え、仕事が終わってすぐに見に行く。

生後1ヶ月半の数匹の子犬。

まだメジャーではなかったウエルッシュコーギーペンブローク。

かみさんのその中の一匹に一目惚れ。

しばらく悩んで、カードで支払い。

ケージやリードなど飼育セットを全てそろえて、約1ヶ月分の給料が消えた。

それでも愛くるしい子犬の瞳を見ていると全てを許してしまう。



そんなペグも12才に高齢になった。

先日、また乳ガンの手術をした。（これで4度目だ）

後ろ足の股関節も弱ってきて、ふらついてきた。

目も白内障気味。

心臓も不整脈がある。

それでも相変わらず、食欲があり、元気に旅人を迎えている。

その後ログも加わり、彼らは僕らにとっては、かけがえのない家族の一員。

ずーっと、杜の樹の始まりから見てきたペグ。

これからも、できるだけ長く杜の樹のホスト犬として、ログと一緒に多くの旅人を和ませて欲しいモノだ。

「犬の系譜」書籍：椎名誠

2009.09.03 Thu



(ニュージーランドの南の湖畔の宿)

湖の畔の小さな宿で、毎日何とも豊かで幸せな時間を過ごしていた。

その宿には、レストランはない。カフェもない。温泉もバスタブもない。テニスコートもなければプールもない。テレビもないしカラオケもない。フロントもなければ、公衆電話もない。もちろん、売店もないし、自動販売機もない。その上、天井の板もなかったし、窓枠は仮留めだった。

宿のある村には、小さな八百屋とカフェとガソリンスタンドが一軒ずつあるだけで、予約をしないとシャトルバスも停まらない。

それでも、その宿にはたくさんの旅人が来ていた。

今から12年前、ニュージーランドの南の湖の畔の小さな村の不完全なる宿でひと月ほど過ごし、いつの日か旅人が豊かで幸せな時間を過ごすことの出来る不完全なる宿を作りたいと、思うようになっていた。

そして8年前、郷里の小樽にそんな宿を開いた。宿にはTVもカラオケもバーも食堂も個室も温泉もない。しかし、一步街へ出ると、そこには居酒屋も寿司屋もお土産屋も映画館もガラス屋も温泉も市場もスキー場も眺めのいい公園も博物館のような街並みも全て充実して、必要なものは全てある完成されたホテルのようである。

そんなこの街を気に入って、何度も来る旅人がいることを日々嬉しく思う。

「不完全なる宿」2007年4月11日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」

これは今から2年ほど前に北海道新聞で初めて書かせていただいたコラムです。

僕はこんな宿を目指しているのだ。

杜の樹の宿としてのコンセプトは「unisk」。

これはアイヌ語で「助け合い、頼り合う、力を合わせる」の意味だそうです。

杜の樹はこのまちの一部であり、このまちが杜の樹の全てのステージです。まちと共に歩んでいかなければ、杜の樹は存在しません。旅人とまちと杜の樹の共生・助け合い・コミュニケーションが杜の樹のコンセプトです。

杜の樹は「宿」です。また、杜の樹は「旅先のあなたの家」です。

カフェもなければレストランもありません。卓球台もなければ、温泉もありません。ちなみにTVもありません。

その全ては「宿」の外にあります。そう、まちに全てがあります。自分のうちで過ごすように、まちを楽しんでください。ここはそんな宿です。

つまり、レストランやカフェから、温泉にプール、バーにカラオケ、お土産屋にコンビニなどなど、全てをそろえたホテルとは対極にある宿です。

一度ホテルには行ったら外へ出る必要にないホテルに対して、もりのきは何をやるにも、ほとんど外へ出なければなりません。

僕は、「杜の樹に行った」という思い出ではなく、「小樽に行った」あるいは「北海道に行った」という思い出が残ればそれでいいと思っています。行っちゃえば、「杜の樹がよかったよ！」なんて嬉しい感想は二の次で、「小樽が楽しかったよ」とか「こんな人に出会えたよ」というコトが胸に刻まれればいいのです。

ですから、街を楽しんでください。

美味しいものを食べたり、または、市場で地元のモノを買ってきて料理してみたり（これは地元でしかできないことかも）

酒を呑むにも、いいバーや居酒屋もあるし、音楽を楽しむ場所もある。

カヤックもホーストレッキングも登山も海水浴もスキーだってできる。

そして遊び疲れたら、杜の樹で休んでください。

それから、杜の樹では、每晚集会があるわけではありません。

カンパ制の飲み会もないし、謡って踊ることもありません。

旅人同士で話が盛り上がっていると、僕はそそくさと場を離れることがあります。

それは、僕は宿の主（あるじ）ではなく、旅人が主だと思っています。

僕はその世話係。

そんな役割なので、僕の印象は残らなくてもいい。

それでいい。

そんな「場」として杜の樹があればいい。

僕が10年前にはじめた宿は、そんな宿です。

それが「杜の樹スタイル」です。



(杜の樹のある水天宮の丘)

「My Foolish Heart」音楽：ビル・エバンス

2009.09.04 Fri



今日はさわやかな朝である。全身がひとつになった気分であり、毛穴ひとつひとつが喜びを吸収している。私は小樽の一部になって、《小樽》の中を自由気儘に往来しているが、何か不思議な気分でもある。（“WALDEN, OR LIFE IN THE WOODS”の「孤独」の章の冒頭をまねてみて・・・）

ニュージーランドで1年間暮らしていたとき、1ヶ月ほどバックパッカーズホステルでエクステンジヘルパーとして滞在していた。

宿のことは、[昨日も書いた](#)が、その宿である。

僕は主に、大工仕事が多かった。庭木にて入れ、芝刈り、ペンキ塗り、ベッド作り、ウッドデッキ作りなどなど。

かみさんは、掃除に洗濯、ベッドメイキング。（右の写真はNZでのヘルパーをしていたころのモノ）

決められた仕事が終わると、後は自由にしていたよかったです。

買い物に行ったり、湖畔を散歩をしたり、本を読んだり、昼寝をしたり、旅人と話をしたり・・・

・

給金はない。その代わりに、二人分の宿代がタダになった。

つまり、

「労働」と「宿代」の等価交換である。

わずか1ヶ月ではあるが、僕らはその村に住んでいたし、村の人たちとも親しくなったし、多くの旅人とも出逢えた。

至福の1ヶ月であった。

宿を作ったら、エクステンジヘルパーを受け入れよう！

それは、作る前からの計画だった。

でもいざ、宿ができてみると、それほど忙しくないし、頼むほどの仕事もなかった。

それでも、募集することにした。

宿としての知名度もなかったし、お金ももらえないというからなのか、なかなか応募はなかった。

最初にヘルパーが来たのは、2003年8月のことである。

オープンしてから4年が過ぎていた。

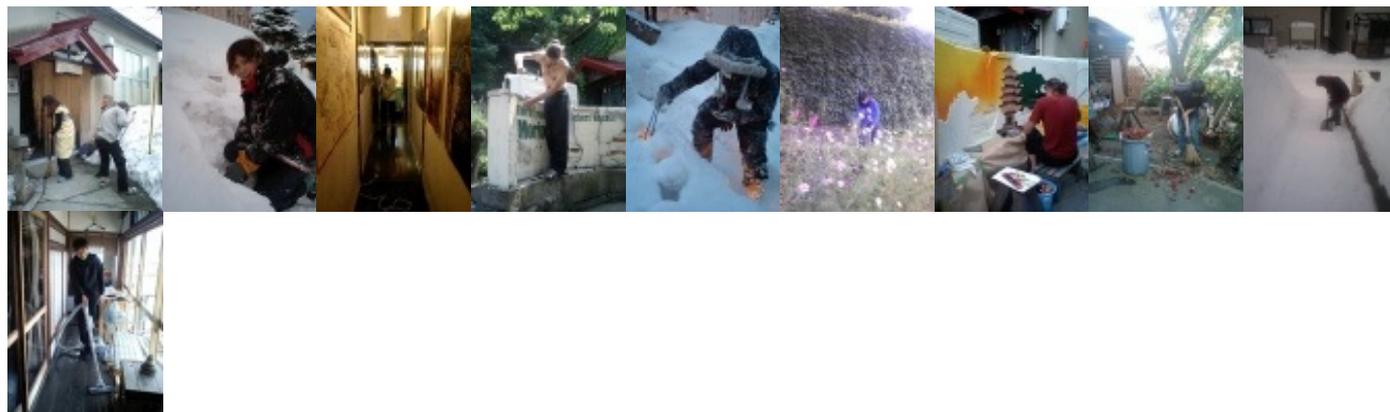
大阪から来た女の子は、5日間ヘルパーとして働いてくれた。

たった5日間だが、小樽人として、この町で過ごしたのだ。

それから、現在（2009/09/04）まで19名のヘルパーが来てくれている。

2回、3回と来ている人もいるので、延べは24人。

うち男性は、6人。外国人は、5人。



夏と冬に来た人、宿の看板を書いてくれた人、自転車で転んでケガをした人、小樽の祭りに参加した人、一緒にイカダレースに出場した人、たこ焼きを作ってくれた人、ヘルパーアルバムを作ってくれた人、雪あかりの路のボランティアとして雪にまみれた人、杜の樹のパーティで料理をしてくれた人、一緒に馬に乗りに行った人、小樽で就職してしまった人・・・いろいろなヘルパーが思い思いの小樽生活をしていました。

“朝、目を覚ますと、そこは自分の町になっていた。”

そんなふうに感じてくれると嬉しい限りです。

ひとときでも、小樽人になって、「杜の生活」を楽しんでみてはいかがでしょうか？

エクスチェンジヘルパーは、宿が忙しい忙しくないにかかわらず、通年受け入れています。期間は最低5日間以上（場合によってももう少し短くてもいいけど）。

詳しい募集要項などは、[もりのきヘルパー's Blog "whoop"](#) もしくは、[宿のサイトの「もりのきヘルパー "whoop"」](#)をご覧ください。

「森の生活」書籍：ヘンリー・D・ソロー

2009.09.05 Sat

Don't Smoke in Bed



っていうか、杜の樹は全室内禁煙ですので、室内でのおタバコはご遠慮ください。（庭はOK!）
さらに飲食もご遠慮ください。

相部屋なので、食べ物のニオイが充満すると、ちょっとイヤですので。飲み物もできるだけご遠慮を。（ごく稀に布団にこぼすことがあるので・・・あまり予備の布団がないんです）

「相部屋」というと、どうも「雑魚寝」を想像する方が多いようですが、杜の樹は全部2段ベッドです。

ニュージーランドでのバックパッカーズ Hostel をモデルにしているので、始めからベッドしか考えられなかったんです。それに部屋は相部屋ですが、ベッドはプライベート。という感じにしたかった。

2段ベッドは、はじめ購入することを考えたけど、どうも日本の2段ベッドは子供用で、小さく低い。下のベッドはちょっとすると頭をぶつけかねない。

それに一番の問題は、値段。

思いのほか高いのだ。

よしそれなら！

と、作ることにした。



ニュージーランドの宿でヘルパーをしていたとき、その宿でベッド作りを体験した。

その時、こんなコトもあろうかと（思っはいなかったけど）チャンとメモを取っていた。

主要部分は、2×4材を使う。

建材でもあるので丈夫だ。

ベッドの床部分はコンパネを使用。

材料費は1台6000円ぐらい。(もしかしたら中古を探せば、安いのはあったかもしれないが・・・)

それほど難しく無くできた。

問題は、女性部屋(洋間)のベッドだった。

この洋間の床は、桜(たぶん)の床板で、幅は不揃いながら、端から端まで1本の板である。(長さおよそ4m50cm)

長年、空き家だったこともあってか、傾いているのだ。さらに中央部が盛り上がっている。(霜の所為?) 水平にしようと修繕をすると、この床板にノコを入れなければならない。それだったら、傾いたままでもいい。

ベッドの普通に作ると、当然傾いてしまう。水平を保ちながらベッドを作るのはちょっと苦勞した。(一人でやっていたモノで・・・)



ベッドができあがったところ、ニュージーランドで知り合った青年(当時)が遊びに来たので、あえて上のベッドで寝てもらった。

ま、人体実験だ。

彼曰く「問題ないし。軋みもないので、寝やすかった。でも、ちょっと高くて怖いかも」と。

この10年で何度か作り直している(ベッドの配置を換えるたびに水平を直さなければならない)が、一度も壊れたことはない。

上のベッドは結構高いが落ちた人もいない。

客室ではなく、プライベートルームの僕らの寝室には、高さ1.8mのところにはロフトを作り、ダブルベッドのマットレスを置いて、そこで寝ている。

これも、もうすでに10年以上経っているが、軋みもしない。(あるのもあるが・・・)

10年を機にいくつか新たに作り替えようと思っている。

ちょっともうひと工夫したい。

いろいろアイデアはあるが、それは宿泊に来たときにでも実際に感じてください。

でも、今はまだ作り直しません。

たぶん・・・来年の夏あたりにお披露目になるかな?(って、言ってしまっただ大丈夫なのか?)

ちなみに、僕は大工でも、大工の仕事をしたことがあるわけでもありません。ただなんとなく、こういったことが好きだけです。もし、詳しい方がいらっしゃいましたら、アドバイスお願いします。

布団についてのエピソード

布団はマイカル小樽（現ウイングベイ小樽）が、1999年3月にオープンした際、小樽ビブレ（現SE-B）で、オープニングセールのひとつとして、布団3点セットが4000円（だったと思う）を限定20組（だったと思う）を売り出す広告を見た。

そして、オープン初日、に開店と同時にビブレへ駆けていった。（何処に何があるのか全くわからなかったが、カンを頼りに「布団」を目指した。）

当時、日本語教師の仕事をしていて、札幌に通っていて、通勤前のわずかな時間しか、僕にはなかったのだ。（11時には札幌にいなければならなかった）

布団を見つけると、店員に

「すみません。この布団セット・・・12組みください。」

本来なら20組欲しいところだったが、20組限定なのでちょっと遠慮が入った。とりあえず、必要と思われる最小限で。

店員は、正直ちょっと困った様子だった。

1名様2組限りとか、限定はなかったが、開店5分で一人に半分以上売ってしまうのは、僕が考えてもどうかと思う。

でも、「あまり時間がないので、急いでいるんですが」と、問答無用で押し切って、配達の手配と、支払いをして、築港駅へ走っていった。

今、使っている布団の約半分は、その時の布団です。

「Don't Smoke in Bed」 音楽 : Holly Cole

2009.09.06 Sun



「おたるないバックパッカーズ Hostel 杜の樹」の由来は・・・

「おたるない」とは、小樽地名の由来であるアイヌ語の「Ota-ur-nai（砂浜の中の川）」から取りました。

宿を作ろうと決めたときから、地名を入れようと決めていて、できることならその街に本来の名前（由来になった名前）にしたかった。ですから小樽で宿を開いたから、「おたるない」と付けたのです。（「おたるない」は「小樽の中」という意味ではありません。よくそう思われています）

「バックパッカー」とは、バックを背負って旅をする個人旅行者のことで、そういう旅人のための宿なので「バックパッカーズ Hostel」。

これも当初からの予定でした。

今では日本国内にたくさんありますが、当時（10年前）ネットで「バックパッカーズ Hostel」と検索しても、日本国内で、ヒットしませんでした。他になかったとは思いますが、たぶん北海道では「バックパッカーズ Hostel」と銘打った宿は初めてではないでしょうか？

「おたるないバックパッカーズ Hostel」だけでもよかったのですが、もし、この名前だけにしていたら、電話に出るたびに舌を噛み、血だらけで接客することになりかねないので、通称（？）を考えました。

（それにいまだに「バックパッカーズ Hostel」が一般的でないようで、旅人の中には意味がわからず、上手く言えない人もいますので・・・）

「杜の樹（もりのき）」は、近くに水天宮（「すいてんぐう」です。「みずてんぐう」と間違える人がたまにいます）という神社があり、その昔は、この一帯が神社を中心とした小高い「鎮守の杜」だったのだろうということで、その「杜の中の一本の樹（全の一）」という意味でつけました。

（ちなみに「樹」は、家代である僕の名前の一字でもあります。）

杜の樹は、一本の木のような宿です。

この森（＝まち）には、市場やカフェや居酒屋やレストランやお土産屋や他のホテルや宿や、学校、病院、マンション、住宅などなどたくさんのいろいろな木があります。

それらが集まって、大きな森（＝まち）を作っているのだと思っています。

ですから、「おたるないバックパッカーズ Hostel 杜の樹」には、

* 過去の小樽の残映。

* 旅の憧憬。

* 旅人との出逢い、語らい。
など、いろんな思いがこもった名前の宿なんです。

「名前のない鳥」音楽：山崎まさよし

2009.09.07 Mon



まずはいきなり余談から・・・

「毎日、回顧録を書く！」なんて言ってしまって、1週間してちょっと後悔している今日この頃。

正直、ネタが尽きてきた。（ていうか、僕には語るべきことはそれほどないのだ）

書く前に、本棚やCD、DVDを眺むように見て、気の利いたタイトルを探す。

これではあれが書けるかな？例の話を書くにはどのタイトルがいいかな？

などなど・・・

さてさて、いったいちゃんと続くのか????

で、今日の話は・・・「本日順風」・・・て？

宿をはじめから、毎年のように旅人は増えている。

実に嬉しいことだ。

先にも語ったが、僕は同業者に知り合いもなく、全くと言ってのこねもなかった。

「オープンするんです。よろしくお願いします。」

と、メールや手紙で、全く知らない全国の同じような宿屋に声をかけた。

反応があるところもあれば、何もなかったところもあった。

それはそれでいい。

ネットと口コミという手段のみではじめたのだから、浸透するまでは時間がかかるだろう。

それも想定済み。

はじめの2年間は、振り返るにも振り替えたくないような有様。

かみさんは看護師の仕事をし、僕は日本語教師の仕事をしたがらの宿屋をやっていた。生活して

いくのもやっとだった。

徐々に増え始めたのは2001年あたりから。

常に右肩上がりで増えてきている。

去年は前年比140%と一気に伸びた。（でもこれは「よすぎる」と僕は思っている）

アジア系旅行者の北海道ブームもあり、外国人も多い。

今ではうちの約6割が外国人。

2005年に発行された[Lonely Planet](#)（通称ロンプラ）の9 Editionから載るようになったのをきっかけに（たぶん）欧米系も増え、外国人の7割弱を占めるようになった。

ブームが去ったのかアジア系は、台湾がこここのところ少ない。

でも、中国本土からの個人旅行者も、徐々に来るようになった。

日本人は、女性が多い。一人旅も多い。

別に、女性受けするように作ってはいないが、結果的にそうってしまったようだ。

残念なことはここ数年20代前半の男性の一人旅が少ない。（グループはいる。）

公表して差し支えはないが、この10年で延べ約8000人の旅人が宿泊している。（平均年間800人ぐらいになるかな？）

この数字が多いのか少ないのかは、判断しかねるが、数字的な問題はさておき、今まで多くの人と出逢ったことに感謝している。

そんな旅人の話はいずれまた。

凧のように、何日も旅人が来ない夜はフラフラと街を歩き、

強風のように、連日大勢の旅人が来てくれているときは、寝る間を惜しみ、

逆風のように、様々な問題が現れても、「明日はいい風が吹く」と酒を呑んだ。

風任せのような宿屋だからこそ、風を楽しもう。

僕にとっては、毎日が順風。

さあ、明日はどんな風が吹くか楽しみだ。



2009.09.08 Tue

Change the World



「世の中を変えてやる！」

とか、そんなことを一度も思ったことはない。

ましてや「世の中が悪い」とも思ったことはない。

「小樽をよくする！」とか、「まちづくり！」と、口にすることはあるような気がするけど、本気で思ったことはない。

宿をはじめて、旅人に小樽で遊んでもらいたくて、ライブ情報やイベント情報をできる限り調べて伝えてきた。

好き嫌いはあるが、僕の好き嫌いを押し付けることはしたくなかったので、とにかくどんなモノでもできる限り調べて伝えようとしていた。

そのメモ代わりにホームページを使っていた。

（今もやっているが）

「お！オモシロイのやってるなあ。小樽行こう！」と思ってくれる人が一人でもいたら、いいなあという思いがあった。

うちに泊まらなくていい。（泊まってくれてもいいけど）

とにかく、小樽に興味を持ってくれればいいと思っていた。

そのうち、

「こういう情報誌があったていいじゃないか！

イベント中心の情報誌があれば、いいんだ。

じゃあ、作ろう！」

と、思い立って、とある情報紙を立ち上げた。

ネットでやりたい人募集！って、書いたら、数人集まった。

そこから始まった。

でも、
正直、僕は「作る側」ではなく「利用する側」になりたかった。
だって、それを使って、どう楽しむか？ どう楽しんでもらうか？それがしたかったのだから。

40になったら辞めようと思っていた。
ま、いろいろの諸事情はあったが、辞めて、今は完全に読者になった。

それでいい。
いつまでも、発案者が意固地に齧り付くことはない。
次ぎに受け渡していけばいいし、無くなるならそれでもいい。
発案者はまた次のことを発案すればいい。

僕は何かを変えようとは思っていない。
「街を元気に！」
とも思っていない。

毎日を丁寧に暮らす。

朝の挨拶をすること。
ゴミの分別をすること。
よく食べ、よく寝ること。
散歩をし、街を見て歩くこと。
そして、
面白いと思ったことにはドンドン参加すること。

そんな日々の暮らし。

いろんな人が喧々囂々とまちづくりを叫んでいるが、
近所のおばさんが、通りの花の手入れをしていたり、
玄関先を掃いていたたり、
ご近所で集まって、BBQをしていたり、
子どもたちが元気に挨拶していったり、

そんなことが、世の中を変えて行くような気がする。
そんなことが、まちづくりのような気がする。

・・・と書いたが、2日ほど記事をアップしていなかった。
丁寧ではないなあ・・・

「Change the World」 音楽 : Eric Clapton

2009.09.09 Wed



小樽は古い建物が多い。

近代建築の第一線の建築家が設計した建物も多い。

明治大正昭和（初期）と、それぞれの時代での最先端の建物だったのだろう。

保存運動も行われてはいるが、毎年のようにいくつかの建物が消えていく。

歴史的建造物の隣に、大きなマンションが建ったりもする。

「景観が悪くなる！」

「小樽の町にあわない！」

と、いろいろな意見を聞く。

僕も昔は「古い建物を保存活用し、あまり新しく大きな建物を建ててはいけない！」と思っていた。

確かに、保存活用は大切だが、僕は新しい建物も重要であると思う。

どうせ建てるなら、今現在の最先端の技術とデザインのモノを建てて欲しい。

効率性とか建設費とかを重要視するのではなく、デザインと技術力を駆使した建物を造って欲しい。

すると、この町は明治から平成の今までの、最先端の建物が存在することになる。

時系列で、その技術やデザインを知ることもしできる。

それはある意味、素晴らしいことではないだろうか？

小樽は常に最先端の街であったはず。

鉄道にしろ、港や埠頭にしろ・・・

そういった小樽の果敢な挑戦が今の小樽のような気がする。

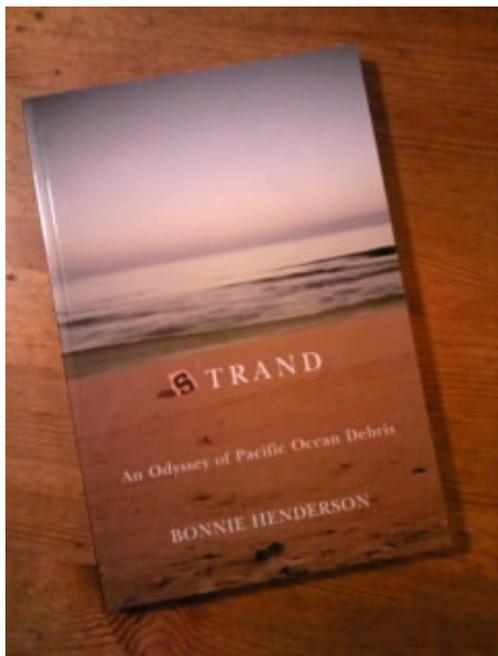
古い物をないがしろにしろとはいわないが、守るだけでなく、新しいモノへの挑戦も忘れて欲し

くない。

でも、[個人的に新幹線の駅とカジノはிரらない・・・](#)

「バビロンの住人」音楽：山崎まさよし

2009.09.10 Thu



ここに一冊の本がある。

タイトルは「STRAND」。「流れ着いた物」という意味らしい。
著者は、アメリカ・オレゴン州のBONNIE HENDERSONさん。

数年前、杜の樹に数泊した女性である。

彼女は、小さなガラスの浮き玉を持ってきていた。それは表面をヤスリで擦ったように曇っていて、かなり長い間放置されたようなガラスの浮き玉だった。

「これはオレゴンの海岸で拾ったの」と彼女は言って僕に見せてくれた。

浮き玉なら、小樽の浅原硝子さんだね。

ということになり、コンタクトを取る。

僕は仕事があるし、通訳をするほど英語が堪能ではないので、カフェメリノの和平さんに通訳とガイドをお願いする。

どうやらその浮き玉は、浅原さんのところで作られたタコ漁の浮きらしいことがわかった。

小樽から海流に乗ってアメリカまで旅をしたのだ。

彼女は、小樽に滞在中、浅原硝子へ取材に行ったり、堺町のガラス屋やガラス工房を見に行ったり、高島の祭りを見物に行ったりと、小樽を歩き回っていた。

しばらくして、本ができたことを知る。

僕はアマゾンで購入した。

まだほとんど読んではいないが、小樽の話が書いてある。（もちろん英語です）その他、オレゴンの海岸でビーチコーミング（海での漂流物拾い）して見つけたリーボックの靴や、鳥の死骸などの話が書いてあった。

機会があったら、ぜひこの本を読んでみてください。（杜の樹に置いてあります）

この秋、僕も小樽の海岸に行ってビーチコーミングをしてみようかな？

ビーチコーミングも小樽の海を楽しむひとつですね。

ぜひ、旅のついでに小樽の海を散策してみては？

「STRAND」書籍：BONNIE HENDERSON

2009.09.11 Fri



杜の樹にはTVがない。

TVモニターはあるのだが、これは一応DVDとスカパー！専用である。だから一般の地上は、新聞のTV欄の番組は見るができないので、「TVがない」と言っている。

でも、「ここにTVがあるのだから、映らないわけがない」と思って、果敢にチャンネルを回す。

（回すって・・・死語？）

でも、映らないのだ。

だって、地上波のアンテナがないから。

今から5年前の2004年9月8日に北海道に上陸した台風18号が小樽を襲った。

樹木が折れ、家屋の屋根が飛んだり、建物の倒壊したり、北海製罐の煙突が折れたり大変な被害をもたらしました。鱗友朝市の倉庫も崩れた。水天宮にのぼると、まだその被害にあったニセアカシヤの木を見ることができる。

杜の樹でも一番大きな梅の木（一番梅の実を多く付けた木）が根元から折れ、危うく建物が壊れるところでした。

その時、TVのアンテナも折れた。

で、それ以来、地上波は見られ無くなってしまったのだ。

ま、もともと見ないんだけど。

映像関係の仕事をしていたのに、TVをあまり見ない生活が身に付いてしまった。

TVを見ないので、タレントの名前は知っていても、顔がわからない。

芸能情報やお笑いのコトに関しては、ほとんど耳に、目に入ってこない。

知らなくても何とかなるし、別に困ったことはない。

ただ、今回、いろいろな事件でお塩先生という人を知ったし、酒井法子が結婚して10才の子供がいたんだと言うことを初めて知った。

TVが無くて困るのは、こんなコトぐらいだ。（僕は困ってない。逆に、新鮮なオドロキがあり、

オモシロイ。)

野球中継や連続ドラマファンにはちょっと申し訳ないが、これがもりのきスタイルだということで、ご勘弁を。

あ、うちにある唯一のTVは、機種変した僕の携帯についているワンセグのみです。携帯でTVが見られるなんて、ちょっと嬉しいけど・・・まず見ることがない。

「台風クラブ」映画：相米慎二

2009.09.12 Sat



10年も宿屋をやっていると、同業者や宿を開業したいという人がときどき来る。京都のゲストハウスの方や屋久島の旅人やどの方、今では日本国内に何店舗も宿を持つゲストハウス王？が、オープン前に話を聞きに来たりする。函館で宿を始めた人も、札幌ではじめた人も来た。小樽で宿をやりたいと思っている夫婦も来た。漠然と宿屋をやりたいと思っている若者もいた。

僕は「やろうよ！」と、言う。
たぶん一度も「辞めたら？」とは言ったことはない。

僕は、うちのような個人旅行者が気軽に泊まれる宿が日本国中に増えることを望んでいる。できれば、外国人も受け入れる宿を。

小樽市内に旅人宿やとほ宿と呼ばれる宿屋は、13宿（ユースホステルやライダーハウスを含む）ぐらいあり、小樽ぐらいの規模の街には多い方だと思う。でも、僕はもっともっと増えればいいと思っている。

それぞれのスタイル、それぞれの雰囲気がある個性的な宿に、個性的な旅人が集まる。そんな個性的な旅人が集まる街「小樽」。そういうイメージが、また旅人を惹き付ける。

「同業者が多くなると、競争が激しくなるよ。」という人もいる。
「杜の樹の利用者が減るんじゃないの？」と心配する人もいる。

確かにそうかもしれない。

僕は、旅人を杜の樹に多く集めるすべは知らないし、うちだけたくさんの人が来て繁盛すればいいとも思っていない。

実際、僕はよく小樽市内の別な宿屋を紹介する。

小樽が気に入りうちに連泊していた人に、「こっちの宿もオモシロイよ」と別に宿を薦めたこともあるし、満室の時は、他の宿を手配したこともある。うちの宿の料金が安いという旅人にはもっと安い宿を、個室が欲しいという人には個室のある宿を、ペットと一緒に泊まりたいという人には可能な宿を。

僕はうちに泊まらなくても、小樽で泊まりたいという人は、小樽に泊まってもらいたいだけなのだ。

そう、僕は小樽の町全体の旅人率が増えることを望んでいるので、仮に、杜の樹がうらぶれて(すでに?)維持していけなくなって、生活できなくなったとしても、他の宿に今まで以上に多くの旅人が来るようになれば、それでもいいと思っている。

宿屋は旅人が選ぶものだから、選ばれなくなってきたということは、旅人にとって、この町にとって必要なくなったということだけ。

そうなったときは、また次のことを考えるしね。

以前、東京から来て小樽で宿泊施設を始めた人が言っていた。

「首くくる覚悟できました。」

「・・・」

宿ぐらいで首をくくらないで欲しい。

僕は小樽は大好きな街でありここで宿屋をやっている以上小樽にこだわっているが、固執していない。

首くくる覚悟があるなら、別の街に行って新たに初めてたほうがいい。首くくる覚悟でね。

たぶん、杜の樹をやっていけなくなるようだったら、「次ぎに行こう」と思うだろう。それは、僕が経営者というより、根が旅人だからなのかもしれない。

ま、今のところまだそういう事態に陥ってないので、当分小樽で宿をやらせてもらうことになる。

「みんなで宿屋をやろう！」

もし、宿をやってみたい人や現在宿屋をやっている方、お時間があったら、杜の樹に遊びに来て
ください。

僕はものすごくオープンに話をします。

今まで泊まったいろいろな宿（ニューージーランドが多いけど）の話、10年やってきてのアレヤコレヤ、これか
らの様々なアイデア。たぶん恥ずかしくなるくらい赤裸々（←誤用）に語ります。

それが何かなお参考になれば、大変嬉しいです。

そして、いろいろな話を聞かせてください。

僕もそれを大いに参考し、旅人のために役立てたいです。

時間があれば、僕からそちら（どちら？）に伺うかもしれませんが、その時はよろしくお願いま
します。

僕は宿屋同士でネットワークを組んだり団体を作ったりしたいとは全く思っていない
。あくまでも自由な個人旅行者のため宿なのだから、こちらも自由な個人宿でいた
いのだ。

「みんなのいえ」映画：三谷幸喜

2009.09.13 Sun



こう寝ているとそれなりにカワイイのだが、杜の樹のホスト犬はよく吠える。
特に誰かが来たとき（旅人でも、集金でも、出前でも）、こちらの声が聞こえないぐらいよく吠える。
初めての人はかなりビックリするようだ。
犬が苦手な方は震え上がってしまうようだ。

僕らのしつけの仕方が悪かったと言えばそれまでだが、もともとの犬種（ウエルッシュコーギーペンブローク）は、牧牛犬で、牧場で牛の世話をしていたらしい。牛を誘導したりしていたのだろう。足のスネをあま噛みして道を正していたという。（ときどき僕もスネを噛まれる。きっと道を踏み外しているときに違いない。）
時には、外敵（オオカミ？キツネ？）などからも、家畜を守っていたのだろう。番犬としての仕事もあったはずだ。
で・・・吠えるのは、もともとの習性に違いない・・・と言い訳です。

人が来るとひとしきり吠える。

「ダレ？ダレか来た？遊んでくれる？遊ぼうよ！なんかチョーダイ！」

と言っているに違いない。
とにかく5分ほど吠えたり、飛びかかったり、匂いを嗅いだりする。
それがすむと、

「なーんだ。遊んでくれないの？何もくれないの？」

と、静かになって、離れていく。

うちのホスト犬はそんな犬たちです。

犬の嫌いな人もときどき来る。

そんなときは、できるだけスタッフルームに閉じこめておく。

宗教的に犬がダメな人も来た。

そんなときも、犬たちに部屋で昼寝をしてもらう。

無邪気な子どもたちが来たときは、

あまりの無邪気さに閉口して、自らスタッフルームに引きこもる。

夜は早くに部屋に戻って寝ているので、夜遅くチェックインする人は、会えずじまいのこともある。

2匹の性格は、かなり違う。

人なつっこいペグ（メス）は、甘えん坊でヤキモチ焼き。で、すぐ吠える。

小心者のログ（オス）は、人見知り激しくせに寂しがり屋。大人しいが、馴れない人が触ろうとすると、嫌がる。臆病です。

二匹ともシニア犬です。

今後あまり宿にいないかもしれません。

でも、日中はできる限り宿にいてもらうようにしたいので、犬が好きな方は会いに来てください。

でも、きっと始めは大喜びで吠え続けます。



「頼むから静かにしてくれ」書籍：レイモンド・カーヴァー

2009.09.14 Mon



銀河鉄道999のメーテルはトランクひとつで旅をしていた。

鉄郎なんかザックすらなかった。身につけている物だけだった。(トランクがあったときもあるような気がする)

スナフキンだって、ギターと小さな袋を持っていたと思う。

マルコ・ロッシだって、アメデオ(サル)と小さなショルダーバックだ。

矢吹丈はマドラスバッグだったし、風大左衛門は風呂敷だった。

大きなスーツケースは、エレオノール(しろがね)ぐらいだろうか？

旅のスタイルは人それぞれだから、何の文句もない。

でも、できるだけ身軽な方が、行動範囲は広がることは確かだ。

荷物は少ない方がいい。

「これはあったら便利だ。」

という物は、便利だけど、大抵使わない。

最小限に絞ってみると、最終的には鉄郎のようになってしまうのかもしれない。

荷物は足枷になる。シガラミになる。

普通に生活していると捨てきれないものが増えてくる。

旅にも、「普段の延長」とアレヤコレヤと持ってくる。

オイオイ、それ要らないだろう・・・と思うようなモノを持ってくる旅人も少なくない。

さて、ご存知の方もいるかもしれませんが、一時期「NO Suitcase」キャンペーン(というほど大々的でないが)をはっていた。

今も、こんなコトを宿のHPに書いている

スーツケースで来られる方に・・・

坂の多い小樽の街には、スーツケースは似合いません。

北海道を旅する時には、スーツケースは似合いません。

毎日移動するような旅には、スーツケースは似合いません。

特に冬の北海道には、スーツケースは似合いません。

杜の樹には、スーツケースは似合いません。

スーツケースは、空港からホテルに車で移動する「Door to Door」のような旅向きだと思えます。

杜の樹に来る旅人には、ひょいと気軽に担いで、すぐに移動できるバックパックをオススメします。それも、極力荷物の少ない方がいいです。

車やバイクや自転車での旅でないのなら、バックパックや小さなボストンバックがいいです。

杜の樹には、バックパックがよく似合います。

杜の樹もスーツケースで来る旅人も多い。

駅からひたすらパッチワークのような舗装道路を、それも上り坂や下り坂をひたすら（といっても10分ぐらい）やってきて、とどめは杜の樹に入口へと続く長い石段。

大変だよな。

まして、これが冬だったら、尚更大変だ。

今はやり？の小さなタイヤ付トランクがあるが、あれも案外不便だ。

北海道はそんなに道はよくないよ。

それにウルサイ。

石畳なんか特にね。

あんなんじゃ、バッグのタイヤもすぐに壊れるよ。（そんなに丈夫じゃないし）



バックパックで来ようよ。

ひょいと担いで。

お洒落な服を着て、お洒落なミュールを履いて、お洒落なメイクして、バックパックじゃお洒落じゃないかもしれないけどね。（個人的にはそれはそれでお洒落かもと思っています）

バックパック似合わせた服装でいいじゃない。

このあいだ、背の低い女の子がカワイイワンピースを着て、大きなバックパックで杜の樹に来た。靴はスニーカー。

とっても素敵だった。

荷物は少ない方がいい。

担いで自由に歩ける程度の荷物を。

これは、僕がキャンプをするときにも、山に行くときにも、旅のときにも心がけている。

それに、出来ることなら、普段の生活すらそうしたいほどだ。

本当に大切なモノは、バックパック一個分。

それを心がけたいね。

でも、モノだけでなく、様々なシガラミが増えてくる。

「何が一番の荷物（シガラミ）は？」

「・・・かみさん・・・」

「・・・」

いざっと言うとき、かみさんをひょいと担いで持っていくのは至難の業だ。(重いとかじゃなくて・・・とりあえずフォロー)

「でも、一人ではもてなかったモノを、二人でもてるようになった。」

うんうん。我ながらいい答だと思う。

「革のトランク」書籍：宮沢賢治

2009.09.15 Tue



日本語教師の資格を取得したのは、1998年。ニュージーランドから帰ってきて2年目。98年は何かと慌ただしく変化した年であった。

杜の樹のオープンする前の年のことだ。

その年の春には、僕が書いたニュージーランド旅行記が賞を獲得し、出版されることになり、杜の樹になるべき家が見つかって、契約やら、改装やらが本格化しはじめた。

僕は日本語教師になってすぐ、札幌の日本語学校で日本語を教えはじめた。

当時、定職を持っていなかったなので、ちょっとしたアルバイト的でもあった。

人にモノを教えるというのは、初めての経験であったが、それなりにうまくいっていた。自分で言うのも何だが、評判のいい教師だったと思う。案外僕に向いている職種なのかもしれないと今でも真剣に考える。



日本語学校の生徒は、ほとんどが中国人で、2年間の日本語研修のあと、大学進学を目標としている。

多くの生徒はマジメであるが、中には日本の生活に慣れすぎてしまい、バイトやら遊びやらと学校に来なくなってしまう生徒もいた。

そういった生徒を、来るように指導するのも日本語教師の仕事のひとつのようなのであるが、そんな指導法は日本語教師養成講座でも日本語教育能力検定試験でも出てこなかったことだ。

それでも、日本語を教えるということはとは面白かった。

「このまま宿なんかやらないで、もっと日本語を教えるスキルを身につけ、海外に行こう」とい

う思いが頭を幾度となく過ぎっていた。

宿をオープンする前の年から、杜の樹に住み始めた。

住みながら必要なところを直していくのだ。

その冬は、小樽商科大学の留学生が、居候していた。（次の年の冬も）

オープンしてからも、僕は札幌に通って日本語を教えていた。

旅人はそれほど来ない。（全くといって）

予約があれば、留守番に母に来てもらっていた。

母は英語が全くわからないというのに、よく外国人の相手をしていただけに感心する。言葉が通じなくても、全く物怖じしないのだ。

オープンして2年目ともなると宿がそれなりに忙しくなり、とうとう札幌通いは難しくなってきた。

思うと宿も学校も似ている。いろいろな生徒が毎年入ってきて、出て行く。さまざまな旅人がいるように生徒もいろいろ。

旅人も生徒もここに留まるわけでなく、時が来たら出て行く。

出ていく者と残る者。

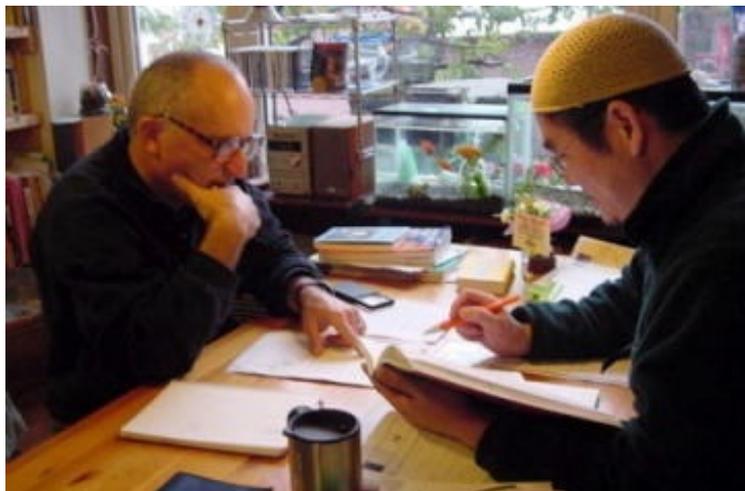
そうかあ、旅だね。これも。

そして僕は、日本語学校を辞めた。

でも僕は日本語教師を辞めたわけではない。

今でも宿で、日本語を教えている。

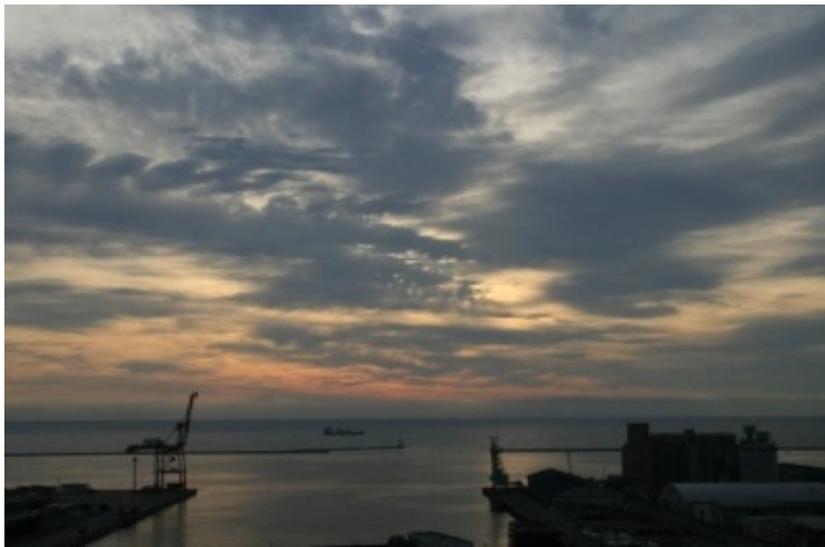
その話は、いずれまた・・・



「やがて哀しき外国語」書籍：村上春樹

2009.09.16 Wed

All I Have to Do Is Dream



北海道でこういった宿をやっていると、
「どちらのご出身ですか？」
とよく聞かれる。

「生まれも育ちも小樽ですよ」
というと意外そうな顔をされる。

たぶんこの手の宿をやってる人は、北海道に憧れて都会から来た人だと思ってるに違いない。
もしくは、若いころ北海道の旅人宿やユースを渡り歩いたり、ヘルパーで働いたりして、この地に居着いてしまった人だと思われたのかもしれない。
確かにそういった宿のオーナーは少なくない。

僕はそういった経緯で宿を始めたのではない。

たまたま宿をやったところが北海道で、小樽だった。
それがたまたま生まれ故郷だった。

それだけでしかない。

僕の宿の記憶は全て海外のものだ。
特にニュージーランドのバックパッカーズホステルだ。

「日本にこういった感じの宿はないよね」
とはじまり、
「あったらいいのにね」

と切望し、

「じゃあ、作ろう！」

と夢を見た。

たぶん、日本にもニュージーランドで体験したバックパッカーズホステルが多くあったら、僕は宿屋をやらなかったかもしれない。

(日本にある旅人宿やユースとどう違うか？と思われる方は多いかもしれないが、これはひと言では説明しづらいので、この話はいずれまた。)

僕は夢見ている。

多くの旅人が自由気儘に旅をしている。

日本人も外国人も。

旅をし、街を彷徨い、その土地のものを食べたり、街で買い物をして料理をしたり。時には、皆で分け合い、自然発生的にパーティになったり、時には知り合った旅人と共に行動し、時には一人で旅立ったり。

その土地が気に入り、何週間もそこにいたり、たまにそこでアルバイトをしたり。

そういった放浪者のような旅ができる世界を。

そんな宿が北海道中に、日本中に、世界中にあったら、僕は今すぐ宿を閉めて旅に出て行くかもしれない。

「All I Have to Do Is Dream」 音楽：The Everly Brothers

2009.09.17 Thu

The Brother From Another Planet



このタイトルでの話は、かなり前から案はあったが、なかなか書けずにいた。
ちょっと変わったゲスト・旅人について書こうと思っていたのだ。
あんな人そんな人と候補は挙がっていた。

でも、書けない。

ゲストに対してとやかく言うものではない。
そう思うと、事細かに書けなくなった。
ひとつひとつ取り上げていったら、途方もないことになる。

だから、ゲストの話はやめた。

素晴らしいゲストもいた。
困った旅人もいた。
笑わせてくれたゲストもいた。
不快な人もいた。
勘違いの旅人もいた。
一芸を披露してくれた旅人もいた。
長く滞在してくれた人もいた。
予約していてこない人もいた。
自分で取った写真で写真集を作って送ってくれた人見た。
本を書いた人もいた。
涙を流した人もいた。
何も言わずに去った人もいた。
酒を酌み交わした人もいた。
固く握手をして別れた人もいた。

いろんな人・旅人がいた。

僕にとってすべての旅人が特別な人たちです。

またいつかお会いできたら、嬉しいです。

僕はもうしばらくここで旅を続けていますから。

・・・タイトルと違う内容になった・・・

「The Brother From Another Planet」映画：ジョン・セイルズ監督

2009.09.18 Fri

メロディーの毛布にくるまって



小樽の冬はもちろん雪が積もります。

それに寒いです。

でも、ものすごく寒いかというと、そうでもないが、南の方から来た旅人にとってはものすごく寒いであろう。（ほとんどの旅人は北海道より南だが・・・）

冬の北海道は個人的に一番美しいと思う。厳しいからこそ、美しいのかもしれない。

で、杜の樹も冬は寒いです。

もちろんストーブはあります。（暖炉や薪ストーブではありません。普通の暖房機です。）

ポータブルのストーブもあるので、家の中は程に暖かいです。

コタツや火鉢もあります。

でも、古い家なので、多少の隙間風もあるし、ホテル並みに暖かいわけではありません。

普通に生活するぐらいは暖かです。



杜の樹には、冬期間の暖房費はありません。

兼ねてから僕はこの「暖房費」というものに疑問を感じています。

なぜ北海道（だけでないかもしれないけど）の宿に暖房費があるのでしょうか？

ホテルなどでは別途請求するところはほとんど無いですが、民宿や旅人宿には、当たり前のように「暖房費別途」と記されています。

暖房費が取られているのに、部屋が寒かったら文句が言えるのだろうか？

ガンガンに暑くしてもいいのだろうか？

「僕は寝袋を持ってきているし、寒いのは平気だから、暖房は要りませんので、払いません」と言えるのだろうか？

なぜ、東京では「冷房費」はないのに、北海道の「暖房費」は許されるのだろうか？

などなど・・・明確な答をもらったことがない。

冬に暖房を使うのは北国では当たり前。

それははじめからわかっているのなら、1年間で必要と思われる暖房費を均して、定価の宿代に付加させればいい。

もしくは、暖房費込みの料金をその宿の定価にして、夏は「特別割引200円オフ」とした方が、利用者には嬉しい。

あるいは「暖房費」などと言わないで、「夏期料金」と「冬季料金」としてもらった方がなんとなく心地いい。（オプションのように選べないのだから、オフシーズンとハイシーズンの料金みたく表記してもらいたい）

昔（今はどうか知らないが）ユースホステルで、シーツ代を取られたときにも、なんとなく腑に落ちなかった。（専用のシーツでなければダメと言われたし）

「冬だから。」

「北海道だから。」

「他の宿もやっていることだから。」

「北国の慣例だから。」

と、決まり事のように「定価+暖房費」なんて、問答無用で搾取されるムダな税金のような感じにも思える。

（他の宿は他の宿なりの考え方はあるので、「反暖房費」とは言いませんが。）

「暖房費」を取りたい気持ちはわかる。

そうせざるを得ないほど、暖房にお金がかかるのもわかる。

でも・・・

と疑問に思うし、自分自身が納得できていない。

ゆえに杜の樹では暖房費はありません。

その代わりに、寒い場合があります。

寒いときには、毛布を無料でお貸ししますし、湯たんぽもレンタルします。（一晩100円？）
温かいお茶もあります。

この冷気も北海道ならではと思って、体験してみてください。
北海道の冬は寒くて温かです。



「メロディーの毛布にくるまって」音楽：SUPER BUTTER DOG

2009.09.19 Sat

Taxi Driver



杜の樹には、送迎サービスはない。

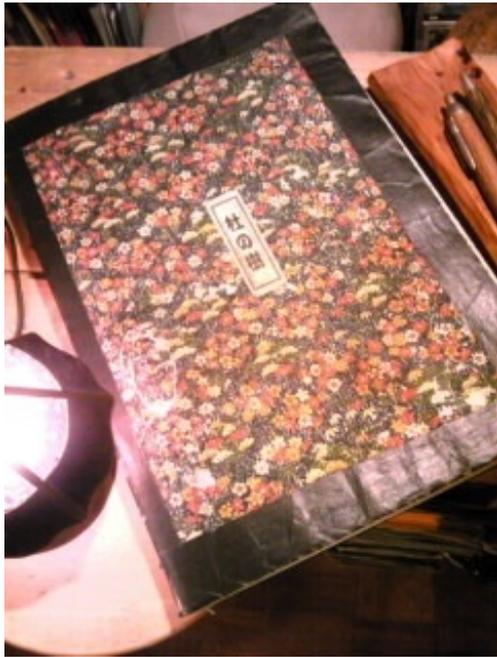
これについて関することを詳しく書きたいが、それはまたの機会に。

※もう少し、長く書くつもりだったが、今は時間がないので・・・すいません。（後日加筆予定）
決してネタが詰まったからではない。

「Taxi Driver」映画：マーティン・スコセッシ監督

2009.09.20 Sun

The Nightmare Before Christmas



別にクリスマスの話ではない。

写真は杜の樹の宿帳である。

400ページあり、1ページ32行。

一人1行として、12,800人、記することになる。(実際は連泊者も多いので、延べ人数はもっと多い)

今やっと半分弱。

折り返し地点だ。

この宿帳は、もちろんオープン前に用意した。

なぜこんなノートにしたかというところ・・・

まだニュージーランドへ行く前、普通に会社勤めしていたころに見た映画「バートン・フィンク」(1991年・コーエン兄弟制作)のあるシーンで、分厚い宿帳に名前を書くシーンがあった。

それがソコハカトナク印象に残っていて、いざ宿をやろうと思ったとき「あんなふうは何年、何十年と同じ宿帳を使って見たら、オモシロイかも」と、頭を過ぎった。

映画に出てくるよいな格好いいノート(?)はなかなか手に入らなかった。

仕方がないので、文房具屋にあった一番大きなノートを購入し、それにちょっと細工をした。

さて、10年も経つとだいぶボロくなってきた。

最後まで持つのだろうか？

で、なんで「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」かというところ・・・その「バートン・フィンク」の映画で、「バートン」・・・「ティム・バートン」と、頭を駆けめぐり、「じゃあ、これでいいかあ。」となってしまった。

クリスマスは、一応キリストの誕生日だし、その前のことだし、悪夢だし・・・「悪夢？」
杜の樹をはじめるとあって、「ナイトメアー」はあったのかな？
と思えば返してみると、あったような無かったような。
結構「悪夢」的なことがあっても、僕は元来忘れっぽいので、「あったかも？」とあやふやな記憶の世界を漂ってしまう。

今日もまたノートが数行埋まった。

「The Nightmare Before Christmas」 映画：ヘンリー・セリック監督
ティム・バートン原作

2009.09.21 Mon



今日は杜の樹10才の誕生日。

たくさんの方が来てくれました。

たくさんのお差し入れがありました。

お花にケーキにワインに手打ち蕎麦に一輪挿しにビールに日本酒にトバに旅行記にドーナツにお菓子に観葉植物に漬け物にフルーツに回転オブジェに赤飯に潮汁にダッチオープン料理に・・・



40名弱の人が集まって、ワイワイがやがや。

やっぱり、乾杯もなく、ただ食べや飲めや語らいや！

初めてお会いする方もいたし、

以前泊まったことがあって、たまたま旅の途中で立ち寄ってみたら、パーティをやっていたので、強制参加させられたり、

新婚旅行できた旅人や

これから結婚しようとしているカップルや

婚約中の一人旅や
誕生日の前日のアメリカ人や、
明日小樽を離れて東京で働く人や、
仕事帰りの人や、
親の見舞いに来ている人や、
酔っぱらいや
男や女や若者や年寄りや・・・
今日だけでいろんなにぎやかな人々がもりのきに集まった。



ほんと10年間、いろんな人に出逢った。

みんな素敵でにぎやかな人。
それは、杜の樹の宝。
なによりのギフトです。

ありがとう。
ありがとう。





「にぎやかな人々」音楽：坂本サトル

2009.09.22 Tue



10年経ったからとか、11年目だからとか、口では言ってみるものの全く気にしていない。だからどう変化するとか、決意を新にとか、これからも頑張るとか、あまり気負ったことは思いはない。

たぶん昨日と今日は差ほど代わりはなく、今日と明日も差ほど代わりはない。

「年年歳歳花相似
歳歳年年人不同」

でも、常に新しい朝が来て、常に新しい一日が始まる。
昨日と差ほど変わらない世界ではあるが、どこかが違う新しい世界。

それが、ただ11年目を迎えたというだけのこと。

さて、ゆっくりと暮らしていきましょう。

のんびりと旅していきましょう。

たぶんここはそれほど変わらず、ここにあり続けるでしょう。

「年年歳歳宿相似
歳歳年年旅不同
日々是旅」

「ビリィ・ザ・キッドの新しい夜明け」映画：山川直人監督

2009.09.23 Wed



美味しいコーヒー

美味しい酒

美味しい食べ物

二人でのひととき

にぎやかな人々とのひととき

楽しい人々とのひととき

嬉しい人々とのひととき

愉快的な人々とのひととき

読書

映画

写真

音楽

山

海

川

森

星

月

雪

風

雨

晴れ

青空

雲

鳥
犬
ネコ
街
家
宿
旅
・
・
・

そして、一人の時間

幸福らしきものをあげるときりがない。

きっと同じように不幸らしきものもあるだろうが、あまり思いつかない。思いついても言わない。
。

ここがそんな「幸福らしき宿」になれたらいいなあ。

「幸福らしきもの」書籍：原田宗典

2009.09.24 Thu



ニュージーランドに行く前は、割と分刻みの生活をしていた。

仕事では、1秒どころか1/30秒まで気を遣っていた。

いたるところに時計があり、僕自身も結納返し（結納などしていないが、婚約指輪のお返しにもらった）の腕時計を四六時中左腕にはめていた。

ニュージーランドに行くにあたって、かみさんとお揃いのダイバーズウォッチを買った。

田舎町や自然の中にいる機会が多かったので、身近には時計が無く、腕時計はやはりいつも身につけていた。

しかし、日本に帰ってきて、すぐに時計を腕からはずした。

時差が1時間半あるままの時計を。

日本には至るところに時計がある。

街の中にも家の中にも。

時計は必要なかったし、僕はニュージーランドで過ごした時間が身に付いていた。

それは日本とスピードが違った。

日本はスピードが速く、帰ってきたときについて行けなかった。

目が回る。

今はもう目は回らないが、腕時計はしていない。

僕の持っているすべての腕時計は電池切れで止まっている。

でも、ケータイやPCには時計が付いているので、ときどきチラ見してしまう。

時間を気にしてはいなが、参考にしてしまう。

杜の樹の中にもいくつか時計がある。

でも、そのいくつかは狂っているし、いくつかは止まっている。

なんかここではそれもいいような気がする。

「小樽時間」と呼ばれている時間がある。

まあ、ちょっとルーズな感じで、待ち合わせなどに遅れたときの言い訳のように使ったりしている。

きっと「もりのき時間」というのも存在しているかもしれない。

ゆっくり、のんびりとし1時間ほどの時差があるかもしれない。

ちょっと時代遅れの過去の時間帯かもしれない。

ゆっくり進む時の流れ。

分刻みに旅をするより、

ときどき何もしない日がある旅をしたい。

その日は

のんびり本を読み、

洗濯をし、

パスタを茹でみたり、トマトソースを作ってみたり。

映画を見て、

昼寝をし、

パンを焼いてみたり、おにぎりを作ってみたり。

サンダルで散歩に出掛け、

高台から港を眺め、

ネコを手なずけてみたり、誰かの家の庭の花を愛でてみたり。

旅の途中の休日。

そんな一日を過ごしてみるのはいかがかな？

「のんびり行こうぜ」書籍：野田知佑

2009.09.25 Fri

書を捨てよ町へ出よう



今年もたくさんの旅行ガイドブックが出ている。
さらにインターネットなどでたくさんの情報が流されている。
TVでも旅番組が多い。

それらを否定するわけではないが、
そこに記されているのは一部の情報であるし、コマーシャルリズムによるものが多い。(そうでもないものもあるけど)

こういった声を耳にしたことがある。

「これこれ、この写真と同じー！」

ガイドブックを片手に小樽運河を訪れていた観光客である。

ガイドブックに載っている写真の「確認の旅」。

あるいは、「検証の旅」。のように僕は感じてしまう。

確かに、そういった旅もいいたろう。

写真で見た風景を自分自身で見たい。

そこで同じように写真を撮ってみたい！

ガイドブックに載っていたお寿司屋さんで、ガイドブックに載っていたイクラ丼を食べてみたい

！

ガイドブックに載っているお土産を買いたい！

TVで話題の生キャラメルを食べたい！

それって「カタログ販売の旅」？

そんな風になってしまうのは、僕だけだろうか？

まだ旅に出るだけでした。

ガイドブックやインターネット、TVで見て知った知識だけで、旅に行った気分になり、行かないで済ませてしまうことも少なくないだろう。

「旅は発見と体験」

僕は常にそう思っている。

出掛けに地図を眺め、目的地までの大体の方向と道順を覚える。

あとはひたすら歩く。

ときどき横道に入ってみたりして、自ら道に迷う。

そこで何かを見つける。

写真では見たことのない景色があったり、ガイドブックには載っていないお店があったり、ネコがいたり、犬に吠えられたり・・・

いつしか目的地か遠く離れてしまい辿り着けないこともある。

それでもいい。

発見したものが心に残り、迷ったことが体験になり、経験になる。

それにいろいろ選べることやいろいろ迷えることが実は「自由」なのだと僕は思う。

そんな旅が僕は好きだ。

もちろんちゃんと地図を見て旅をすることもある。（それはそれでいい。）

どんどん迷おう。

なんでも見よう。

たくさん体験しよう。

さあ、大いに迷って自分の旅をしてください。

そこにはガイドブックでもインターネットでもTVでも紹介されないあなただけの旅があるはずだから。

まあ、僕も未だにいろいろ迷って生きていますが・・・

僕は「ここいいですよ！」とか「この店はオススメですよ！」と提言するのが実はあまり好きじゃない。

それは僕の本当に私的なイメージでの話でしかなく、旅人の想像力や行動力を制限してしまうように感じるからだ。

それでも、聞かれれば、「ここはいいよ！」とか「このルートがいいかも」と言ってしまおうし、オリジナルの観光マップを作ったりブログなどで紹介したりしている。矛盾しているが、そうせざるを得ないこともある。それに「迷う旅」を望んでいない旅人も多くなってきた。僕の好みを押し付けるようで好きではないが「杜の樹のオススメ」を語る場合も多い。

僕はまず旅人の好みを聞くようにしている。出来る限りその好みにあったお店や場所を紹介するようにする。それも1件だけでなく数件。

ただ僕の選択が偏っていたり、間違っていることは大いにあるので、そのときは許してください。

「書を捨てよ町へ出よう」 評論・戯曲・映画：寺山修司

2009.09.26 Sat



大型連休の台風が過ぎると、一気に宿は人が少なくなる。
あまりこういった連休は好きではない。
平均的に人が来てくれた方が嬉しい。

わりと雨が好きです。
ていうか・・・雨も晴れも曇りも好きだ。
もちろん雪も好きです。

て、天候の話をするわけではない。
で、何の話を書こうかとしばし考える。

回顧録と言いながら、思い出をあまり書いていないことに気が付く。

10年・・・というと「すごいですね」と言われるが、そんな風に思っていない。
実際それほどすごくはないのだ。
たった10年だ。
10年以上宿をやっている人だってもの凄くいる。
10年なんて、あっという間だった。

10年前、宿屋をはじめた。
その10年前は、結婚した。
その10年前は、中学生で、全くと言って思い出せない。
その10年前は、やっと日本語をまともに話せるようになったぐらい。
その10年前は存在すらしていない。

そんな単純な時の流れのほんの一部に過ぎない。

雨も降る。

でも必ずといって、雨はあがる。

曇りだって、吹雪だってあった。

もちろん快晴の日も。

この10年だって、いい時もあれば悪い時もある。

でも、あまり悪い時の記憶はない。

何かが壊れ、何かを失い、取り返しの付かないこともあった。

でも、「それもありだな」と思える。

そんなものだ。

宿泊ゲストも少なく、かみさんも体調を壊し仕事を辞め、ますます生活が苦しくなった時もあった。

本心からやりたいことがあったが、いろいろな事情で断念せざるをえないこともあった。

悔しさと、つかみどころのないやりきれなさ、先が全く見えない不安で寝られないこともあった。

歯をくいしばって堪えたこともあった。

でも、どうあがいたって、明日のことは不確定要素でいっぱい。

いつか雨はあがり、日が射してくる。

雲が消えていくように、いろんなマイナス要因も有耶無耶に消えていく。

それに、快晴ばかりでは花は育たない。

雨だって、雪だって、風だって必要なのだ。

宿を続けていてよかった。

今はそう思う。

そしてこれからも、宿を続けていこう。

きっと、次の10年後にも「いい天気だ！」といえるような気がする。
雨と晴れと曇りの繰り返しの中で、ここでゆっくりやっ払いこう。
丁寧に暮らしていこう。

・・・やっぱり思い出話にはならなかった・・・

「雨あがる」映画：小泉堯史 監督

黒澤明 脚本

山本周五郎 原作

2009.09.27 Sun



いやはやよく寝てしまった。

夕食後、ちょっと横になったら、もう11時だった。

それも小さなソファにうずくまって。

宿泊ゲストがいる時は、その時にもよるが、1時か2時頃寝る。酷い時は4時頃寝ることもある。早く寝てしまうゲストが多い時でも12時前には寝ることはない。

旅人の語らいで愉しく過ごしているので、それはいい。

その語らいのあとに、最後にすっかりぬるくなった風呂に入り、風呂を軽く洗い、ビールを飲んで、事務的工作（帳簿とかメールの返信とか）をする。そしてベッドで本を読み、眠る。

起きるのは、決まって6時。どんなに寝るのが遅くても、6時には起きる。ゲストがいる、いないにかかわらずこの時間だ。（5時ぐらいに出発するゲストもいるので、もっと早く起きることもある）

6時に起きる、あるいは起こされるのは「犬の散歩」があるからだ。

雨が降ってようが、吹雪だろうが、1日に2回散歩に連れ出す。

最近は何が年老いて足が悪くなってきたから、長い時間の散歩は出来なくなったが、それでも6時半頃には散歩に行く。

犬の散歩だけでなく朝はいろいろ忙しい。

朝食用のパンが焼けるのは、6時半。

それまでに、新聞チェックと、ネットで天気の詳細を見て天気の詳細。

「確かあの人は、東に行くって言ってなあ」

と、小樽だけでなく、知っている限りのゲストの行く方の天気もチェックしておく。（ま、全道チェックですね。）

自分たち用のご飯を炊き（ガスなんです）、散らかしたテーブルの上やソファを整えてると、もう6時半。幾人かのゲストは起きてきている。

犬たちがざわつきはじめるので、散歩に行く。

戻って来てからは、かみさんのお弁当作り。

そのころ、かみさんも起きてきているので、ゲストの朝食の前に朝ご飯を食べてもらう。（一緒に食べてしまうことが多い）

そして、ゲスト用の朝食に支度。パンを切り、コーヒーを淹れる。

朝食は7時半から。いつもギリギリ。

7時半前から待っている人もたまにはいるが、大抵はまだみんな寝ているので、コーヒーは起きてから入れるようにしている。

冬になると、「雪かき」が、否応なく折り込まれるので、時間のやりくりをして対応する。

というような、感じで、案外睡眠時間が少ない。

で、大切なのが「昼寝」。

ゲストがみんな旅立って、まだ新しい旅人がいない時間帯。

午前中に掃除やベッドメイクが終われば、昼飯あとから3時ぐらいまでの間、昼寝タイムである。

でも、実際は1時間も寝る時間はない。

それでも、この「昼寝」が体力回復になっている。

ここ数ヶ月は、この「昼寝」が出来なかった。

それは秘密基地作り。

昼間はこちらに時間が割かれた。

で、その反動で夜が眠い。

ときどき「10分寝る！」と、受付の中やソファや縁側で寝てしまうこともある。

でも、大抵10分で起きる。

10分でも熟睡している。

昨日は約3ヶ月ぶりにゲストなし。

今日もゲストなし。

で、今日は完全な休み。（日本語教室が2コマあったけど）

夜、ついつい長く「昼寝」をしてしまったようだ。

杜の樹には「昼寝」スポットがいくつかある。

夏の縁側や畳の部屋、冬のストーブ前などは、魔の誘惑スポットだ。

ときどき吊る大型のハンモックもいい。（ものすごく場所を取る）

もちろんベッドもいい。

昼寝も楽しいですよ。

「夢みるように眠りたい」映画：林海象 監督

2009.09.28 Mon



僕は楽器はやらない。

というか、カラオケもやらない。

だからといって音楽が嫌いなわけではない。

杜の樹では音楽は常に何かしらかかっている。

特に嫌いな音楽はないが、好んで聞くのはJAZZかな？

ロックも好きだし、レゲイやスカも聞く。もちろん日本の曲だって好きだ。

CDだって結構持っている方だと思う。無造作に集めてはいるが。

宿には幾枚かのレコードもあるし、もちろんプレーヤーもある。（実は3台ある）

でも、歌も楽器もやらない。

ていうか、楽器は全くできない。

杜の樹には、ギターもあるし、オルガンもある。

どこかにハーモニカやリコーダーもある。

ムックリだってある。

カホンを作ろうかと真剣に考えている。

でも、僕は楽器はやらない。

なんか、こういった宿をやっているオーナーは、楽器をやっていて、夜な夜な自慢の喉を披露する人が多いとか。

僕も、よく聞かれる。

「やらないんですか？」と。

「うん。やらない。」と、自信いっぱいにする。

だって、できななんだもん。

たとえば、美味しい料理を食べに行く。

その時思うのは、

「あー、美味しかった。また食べにこよー。」と思う人と、

「あー、美味しかった。どうやって作ったのかな？」と思う人に分かれる。

料理でいえば、僕は後者である。

だから料理は好きで、作ってみたいくなるし、実際に作ることも多い。（かみさんは前者）

で、音楽だって同じようなもので、いい音楽を耳にした時、

僕は「やってみたい」と言うより、「また聞きたい」と思うのだ。

聞くのが好きなのだ。

ただそれだけのこと。

杜の樹では、ライブもやらない。

一度だけ、[音座なまライブ](#)（今年は10/11開催）の会場になったことがある。（写真はその時のもの）

またやって欲しいというオファーはあるけど、僕としては「うちなんか来るより、もっといい店が小樽中にあるからそっちに行って欲しい。うちの泊まり客もどンドン小樽中に送り出したいし」という思いなので、今のところ断っている。

会場数も増えたしね。それでいいのだと思う。

でも、完全にやらないというわけではない。

ライブをやりたいという人がいたら、考えないでもない。

それはその時に・・・

ときどき旅人がギターを弾いてミニライブになることもある。

尺八を披露してくれた女性もいた。

三線の練習をしていた人もいた。

オルガンでねこふんじゃったを弾く人は結構多い。

楽しんでもくれるなら、自由にうたってもいい。

そうそう、たとえば、

「宿屋を中心に投げ銭ライブの旅！」

という企画で、北海道ツアーをする人がいてもオモシロイかも。

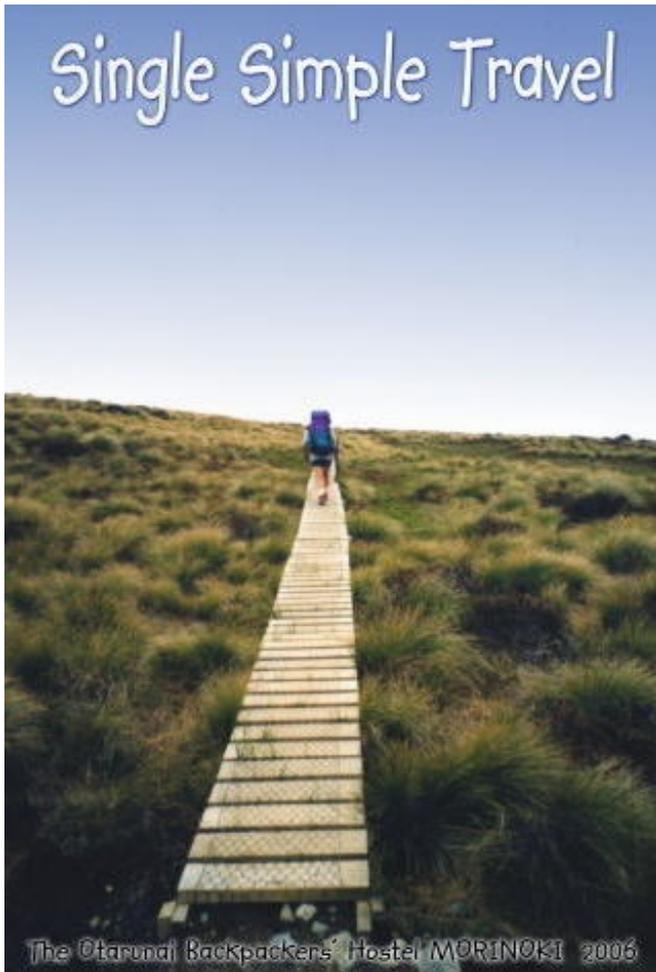
そういう人がいたら、ひとくち乗らせてもらうかも・・・

来年あたり、一度ぐらいライブをやってみようかな？

やりたい人がいたらだけど・・・

「歌ウコトノハ」音楽：和田京子

2009.09.29 Tue



過ぎてしまえば、全て「よかった」と思えるようになる。

「10年やってきて、一番の出来事は？」

「宿を始めたことです。」

「10年やってきて、一番楽しかったことは？」

「宿を続けられているということです。」

「10年やっていて、一番辛かったことは？」

「こんな質問を受けていることです。。。」

と・・・という具合に全くTV的な話はない。

涙ながらに「あのときは本当に死のうと思ったぐらい大変でした」などという話は、あったかもしれないが、そんな話してどうなるのだろうか、いつも思ってしまう。

乗り越えたんだし、死ななかつたんだからいいじゃないか。

でも、僕はこうは言っても、それほど野放図な楽道家ではない。

結構ダメダメ人間で、いつも壁にぶち当たっている。

「行き止まりばかり」

と、よく言っていた。

失敗や後悔も多いし、後に尾を引くことも少なくない。

ま、そういう時はブツブツ言いながらでも引き返せばいい。

最近は疲れることも多くなってきて、

ゲストがいないと、かなりだらけている。(飛び込みが来ると慌ててしまう)

ONとOFFの切り替えがうまくいかないのかもしれない。

ゲストがいれば、それはもうフル回転のレッドゾーン(ではないが、それなりに)で、楽しく軽やか(?)に動いている。

でも、ゲストがいなくても、スイッチが切れず、気持ちは常に「ON」状態で、ちゃんと動いてればいいが、ときどき、やる気の回転数がガクーンと遅くなったり、ダラダラと悪態を垂れ流したり、プスプスと後悔がくすぶっていたり、急にドッカーンと怒りのバックファイヤーしたりしている。(かみさんにはいい迷惑だ)

完全OFFにしてオーバーホールも必要だなあ。

ま、もう少し動けるトコまで、動いてみよう。

「行き倒れバタリ」となってしまうかな？

だって過ぎてしまえば、みな平穏な日々。

当時はものすごく大変だったとしても、

どんなに破天荒な毎日あっても、

スリルと誘惑に満ちた旅をしてきたとしても、

あとで思うと「それさえも おそらくは 平穏な日々」。

そう、この10年もおそらくは平穏な日々だった。

これからも **豪華絢爛** 紆余曲折 冒険活劇 滋養強壯 酒池肉林 波瀾万丈 商売繁盛 五里霧中 四苦八苦 安全第一 危機一髪 七転八倒 誇大妄想 四面楚歌 年中無休 金襴緞子 一攫千金 戦争反対 百発百中 支離滅裂 な毎日を過ごしていこう。

そして、あとになって「ああ、なんて平穏な日々だったんだ」とポロリと言おう。それが僕のさやかな夢(?)である。

「それさえも おそらくは 平穏な日々」 マンガ：たがみよしひさ

※今回で「回顧録」は最終回です。もしかしたら、こんな話を不定期で書くかもしれませんが、それはまたその時に。くだらない話にお付き合いいただきありがとうございました。

2009.09.30 Wed

不完全なる宿

湖の畔の小さな宿で、毎日何とも豊かで幸せな時間を過ごしていた。

その宿には、レストランはない。カフェもない。温泉もバスタブもない。テニスコートもなければプールもない。テレビもないしカラオケもない。フロントもなければ、公衆電話もない。もちろん、売店もないし、自動販売機もない。その上、天井の板もなかったし、窓枠は仮留めだった。

宿のある村には、小さな八百屋とカフェとガソリンスタンドが一軒ずつあるだけで、予約をしないとシャトルバスも停まらない。

それでも、その宿にはたくさんの旅人が来ていた。

今から12年前、ニュージーランドの南の湖の畔の小さな村の不完全なる宿でひと月ほど過ごし、いつの日か旅人が豊かで幸せな時間を過ごすことの出来る不完全なる宿を作りたいと、思うようになっていた。

そして8年前、郷里の小樽にそんな宿を開いた。宿にはTVもカラオケもバーも食堂も個室も温泉もない。しかし、一步街へ出ると、そこには居酒屋も寿司屋もお土産屋も映画館もガラス屋も温泉も市場もスキー場も眺めのいい公園も博物館のような街並みも全て充実して、必要なものは全てある完成されたホテルのようである。

そんなこの街を気に入って、何度も来る旅人がいることを日々嬉しく思う。

2007年4月11日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」

2007.04.11 Wed

一人旅

今年もGWにいろいろな旅人がやってきた。雪が消え、花が咲き始めるこの大型連休は、私にとっての新学期でもある。宿が冬仕様から夏仕様に衣替え。それに伴い大掃除もする。廊下や縁側のワックスがけや各部屋の煤払い、庭の手入れをし、ウッドデッキに防腐剤を塗り、談話室でもある和室にバーカウンターを設ける。しかしながら、毎年の如く、連休前には終わらず、やりかけのまま、申し訳ない気持ちで旅人を迎えてしまう。

宿を始めて8年。旅人のカタチが徐々に変わってきている。特に女性の一人旅が増えているのが目立つ。

私が放浪の旅を始めた20年あまり前は、一人旅といえば若い男性が多かった。ちょっと世の中を斜に構え、何かを求め、何でも見てやろうとひと癖もふた癖もある青年が旅をしていた。

しかし、最近はそういう男性が少なく、男同士のグループか、カップルが多い。群れたがる男性に対して、女性は一人での楽しみ方をよく心得ているようだ。

もちろん、男性の一人旅がないわけではない。たまたま、うちの宿に少ないだけかもしれない。もしくは、小樽という街がそうなのかもしれない。以前一人旅の男性にこう言われたことがある。

「小樽はロマンチックすぎて、男一人では辛すぎる」と。わからないでもない。

2007年5月18日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」

2007.05.18 Fri

もっと話したい

日本語の塾を始めてもう五年たつ。もちろん日本語教師の資格を持っているし、日本語学校でも教えていた。

これまでも幾度かこんな質問を受けたことがある。

「日本人は十年近く英語を勉強しているのに、なぜ話せないの？」

日本語を学ぶ外国人は、片言でも一生懸命話そうとする。間違ったり、言葉が出てこなかったりしても、昨日のことや週末の予定を楽しそうに話す。初めのころはとにかく下手である。何を言ってるのか判らないときもある。それでも、「話したい」という思いを大切に、私は耳を傾ける。一年もすれば、談笑ができるほどになる。

以前、日本語を全く知らないフランス人が泊まりに来たことがある。

私はフランス語はできないし、彼の英語も怪しい。でも、三泊するうちに、お互い英語混じりのフランス語と日本語で会話をし、何度も聞き返したりはするが、何が言いたいかわかるようになる。

言語を学ぶ上で、この「話したい・伝えたい」ということが最も大切なのかしれない。文法や単語力などの正確さではないと思う。

さて、宿ではできるだけ日本語を使うようにしている。

それはせっかく日本を旅行しているのだから、日本語に接する機会をたくさん与えようとする、私なりのおもてなしである。

決して「英語が苦手だから」という理由ではないと、しておいてください。

2007年6月22日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」より

2007.06.22 Fri

ホスピタリティ

私のところのような宿を「ゲストハウス」とか「ホステル」という。ホステル (Hostel) の語源はホテル (Hotel) と同じく、ラテン語の “hospes” (旅人・巡礼者) であるといわれている。これは “Hospital” (病院) の語源と同じ。つまり、ホステルもホテルも病院も疲れた旅人 (病人) が安らぎと憩いを求め、リフレッシュあるいは治癒し、またそこから旅立っていくという場所なのである。

そして、そこから “Hospitality” (ホスピタリティ・おもてなし) が生まれた。

「おもてなし」の語源は「モノを持って成し遂げる」という意味で、接客業・サービス業の限らず、すべての家、人に言えることである。つまり“おもてなし”とは一般的なことで、それほど仰々しいことではない。普通に家に客人が来たときの対応でいい。それにその家その家におもてなしの仕方があるように、観光地や店もそれぞれのやり方でいいと思う。お茶菓子に漬け物を出すところもあれば、ふかふかのソファでケーキを出すところがあってもいいのだ。背伸びをせず、他にはない個性溢れるおもてなしが、旅人にとってステキなことだったりする。

小樽には個性的な宿が数件ある。個々の宿にはそれぞれのおもてなしの仕方があり、雰囲気がある。この夏、また2軒ほど増えた。小樽にこんな宿がさらに増え、安らぎと憩いを求めた個性的な旅人で賑わう「旅人の街」になれば面白いと常々思っている。

2007年7月27日 北海道新聞 (夕刊・後志版) 「えぞふじ」より

2007.07.27 Fri

「色々あって疲れ切ってここに辿り着きました。小樽・・・なんてステキなところなんですよ。このあとまたがんばるぞ！」

その旅人が残した言葉には、至高のプレゼントを貰ったような幸福がある。彼女はこの旅で今までの考え方や人生観まで変わったと言っていた。「旅」にはそういう魅力がある。

もうひとつ旅の魅力に「食」がある。でもこれは日本人に多い傾向で、欧米系の旅行者は、旅に「食」を求めていない。どちらかというところ「食」には無頓着である。私の宿は自炊ができるので、パスタなどを自分で作っている旅人もいるし、ワインとチーズを買ってきてそれで済ませる人もいる。ある意味自分のスタイルを崩さない頑固さを感じてならないのだが、彼らは彼らなりに旅を楽しんでいるようだ。

日本人からは毎度の如く同じ質問を浴びせられる。「安くて美味しいお寿司屋さんは？」、「オススメのラーメン屋さんは？」、「カニを食べたいんだけど？」と。

日本人の旅には「食」が欠かせない。キャンプなどは別のようなのだが、旅に来てまで自炊などしたくないと思う旅行者も多く、日本人でキッチンを使う人は少ない。

でも、ちょっと違った旅を試してみるのも面白い。市場に行っているいろいろな物色し、食材を買って、自分で作る。そこに新しい旅の「食」を感じると思うので、一度ぜひ試してもらいたい。

2007年8月31日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」より

2007.08.31 Fri

助っ人

今、私の宿にはエクスチェンジヘルパーがいる。このエクスチェンジヘルパーとは、少し宿の手伝いをしてもらおう代わりに、宿代をタダにするというもので、3日ぐらいから長い人で1ヶ月ぐらい働いてもらっている。

仕事はベッドメイキングや掃除、雑草取り、接客、留守番などさまざまである。大体9時から12時ぐらいまでの3、4時間の労働。食事は自炊が基本。

正直に言うと、私の宿のように小規模のところでは、ヘルパーやアルバイトを必要としていない。日々の仕事はほとんど一人でこなしてしまうのだ。

ではなぜヘルパーを集っているかという、文字通り「エクスチェンジ=交換」が目的である。労働力の交換だけでなく、人と人の交流である。ヘルパーには、女性だけでなく男性もいたし、外国人も来てくれた。そして彼女たちは、空いた時間を使い小樽を歩き回っている。市場で買い物をし、カフェでおしゃべりをし、図書館で本を読み、公園でくつろぎ、路地裏を彷徨い、居酒屋でほろ酔いになる。いろいろな人と出逢い、いろいろな話をし、いろいろな体験をする。彼女たちは一時的な小樽の住民なのである。

そして私は彼女たちから小樽での生活の話を聞く。「ああ、なるほどね」と思うコトも多々ある。そして「行ってみたい街」から「住みたい街」に彼女たちが思うようになったら、素敵だと思う。

2007年10月10日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」より

2007.10.10 Wed

郵便局とほスタンプラリー

郵便局が民営化して、初めての年賀状シーズンを迎えた。少し前の話ではあるが、10月上旬に「小樽中の郵便局を廻ろう！」と決意し、実行した。小樽市内には33の郵便局がある。（簡易郵便局を除く）その郵便局を廻り、窓口で貯金をし、スタンプをもらう。それも徒歩で移動し、2日間で完全制覇する。まさに過酷な？スタンプラリーだった。

1日目、まずは電車で銭函に行き、銭函郵便局へ。でも、初めて行く郵便局なので、最初迷ってしまった。開店と同時に入り、窓口で貯金。ATM以外で貯金をしたのは何年ぶりだろうか？少し戸惑うが新鮮な感動。スタンプは押してくれなかったので、「すみません、スタンプください」と催促する。そこから、銭函西、張碓、朝里と郵便局を徒歩で廻り、堺町郵便局で1日目は18局で終わる。

2日目は蘭島郵便局からスタート。西部の郵便局15局を回り、小樽郵便局で終え、歩いた距離は二日合わせて約55キロになった。

趣のある忍路郵便局やアオバトの剥製のある張碓郵便局、通りに馴染んでいた若竹郵便局、壁が緑色の緑二郵便局、いろいろ話しかけてくれた長橋四郵便局。歩きながら見た海や山や路地や街。見慣れた街の別な表情に触れることができ、足が痛くても満足できる旅のひとつだった。貯金も貯まった。

でも、数年後、この中の郵便局いくつかは淘汰されているかもしれない。そう思うと少々淋しい気がする。

2007年11月30日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」より

2007.11.30 Fri

来者勿拒、去者勿追

よく耳にする「来る者は拒まず、去る者は追わず」は、「離れていった人はもう関係ない」的な意味で使われるが、中国語の「去」には、日本語の「去る。離れる」だけではなく、「行く。出掛ける」という意味がある。たしか、国境を行き来する遊牧民のことを言っていた言葉だと聞いた。人の行動を国境や法律、利害などなどで無理に束縛してはいけないという意味だったと思う。

「去る者は追わず」といって、その行動がどんなに本人の強い意志のもであっても、明らかに間違っただけであれば、引き留めるし、別な道を進めるのも大切かと思う。

それに夢を追って出て行くのであれば、応援しバックアップしていくことも関わりを持った人に対して大切なことだと思う。

「人は人。自分は自分。」と個人主義はいいが、人としての繋がりを考えると「勝手にすれば！」と言い放っているようにも思え、関わりを持った人に対して、あまりにも冷たい言葉のように感じる。私は常々そう思っていて、あまり好きな言葉ではないので、ほとんど使わない。

私は宿屋を営んでいる。今年も様々な旅人がここに来て、ここを去っていった。私は「来る者は拒まず、去る者は追わず」を自由な旅人に対しての暖かい言葉として使いたい。

「いらっしゃい。」そして「行ってらっしゃい。」のように。

2007年12月28日 北海道新聞（夕刊・後志版）「えぞふじ」より

2007.12.28 Fri

長い旅に出よう

毎年のことだが、年始めは一人旅が少ない。北海道を一人で旅するには淋しすぎるのとき季なのかもしれない。

初めての長い旅は、一八才の時に三ヶ月間の東南アジア放浪。それから、アメリカの半年、夫婦で一年間暮らしたニュージーランドと私の旅はそれほど数多くはないが、どれもが帰る日を決めない長い旅だ。それらの旅で今までの価値観や考え方が変わったことがある。それは「旅」という行為によってではなく、多くの人々との出逢いだった。たとえば、バンコクの安宿の薄汚い青年に貧困と豊かさを、アメリカ大陸横断バスで知り合ったカナダ人に一人旅の醍醐味を、ニュージーランドで自給自足を試みるコミュニティの人々に自然の大切さと人の繋がりを教わった。名前も顔も確かなものではなくなってきたが、彼らの言葉は今も私の中にある。

今は立場が変わり、旅人を受け入れる側になっている。

初めて一人で旅をする鳥取の少女。水族館の研修に来た大学生。ガラス職人を目指す青年。就職で来た女性。論文を書くため暑い京都を抜け出して来たイギリス人教授。世界一周中のスウェーデン医学生。ニュージーランドの子どもたち。毎年屋久島から来る同業者。旅人はここに来て、去っていく。今年はどんな旅人と出逢えるのだろうか。楽しみでならない。

2008年1月18日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.01.18 Fri

スタイル

「私の街ではこんなコト考えられない」そう鼻息荒く憤慨しているゲストがいた。詳しく聞いてみると、大雪のためタクシーが細い路地に入ることができず、途中で降ろされたとのこと。

小樽ではよくあることだ。急な坂道の上にある家など、上がることができず、坂の下で降ろされる。乗客もよくわかっていて「そこ入らない方がいいから」と手前で降りることもしばしば。雪道で埋まり、乗客である私が後ろから押したこともある。だからといって「接客がなってない」と思ったことはない。

「おもてなし」という言葉が、あちらこちらで聞かれる。よく小樽は観光が盛んなのに「おもてなしの心」が三流という声も聞く。

しかし、私はこの「おもてなし」というのは、その土地や店、人によって違うモノだと思っている。比較する必要もなければ、他をまねる必要もないと思う。大切なのは「スタイル」である。

フレンチレストランのスタイル。定食屋のスタイル。高級ホテルのスタイル。ゲストハウスのスタイル。北海道のスタイル。小樽のスタイル。そして、そのスタイルにあったおもてなし。個々のスタイルを無くして、おもてなしのみを追求してしまったら、個性もなく味気もないモノになってしまう。受ける側もその違いを楽しむことが粋なスタイルだと思う。

2008年2月29日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.02.29 Fri

イースター休暇を利用してアメリカから5人家族が連泊していた。子どもたちはみな小学生で、ちょっと大人しい。長男は学校で日本語を勉強していて、宿にあるマンガやアニメのDVDを食い入るように見ている。長女は毎晩熱心にメールを書いていた。聞くと送り先は学校の先生で宿題を提出しているのだと言う。宿題は今回の旅行のことで、特にアイヌ民族についてがテーマであるらしい。連泊中、旭川や白老、札幌などのアイヌ関連施設を訪れ、一家は有意義に過ごしていた。

私がニュージーランドの農場で働いていた時、その中学生が学校で行くキャンプのプロジェクト学習をしていた。まず、行き先はグループに分かれ、プレゼンテーションし決める。そして、そこまで行く手段と料金等を調べ、バス会社などと生徒が交渉する。さらに旅費は自分たちで稼ぐ。消防署を借りて洗車をしたり、ファーストフード店でオリジナルセットメニューを販売し、お店でもお手伝いをする。もちろん客は親や身内であるが、直接お金をもらわないところが素敵だ。やっとの思いで行ったキャンプは楽しかったようだったが、帰ってからノートいっぱいのレポートを見せられ驚いた。キャンプで見てきた動植物やその地の歴史などが書き込まれていて、その発表が終わるまでプロジェクト学習は終わらないのだと言っていた。

学ぶと言うことは、机に向かって「読み書き計算」だけではない。旅をするといろいろな発見があるものだ。

2008年4月10日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.04.10 Thu

日本語を話す

私の宿は個人旅行の外国人が多く、この連休中にもアメリカやフランス、オーストラリア、カナダ、韓国、香港などから旅人が来て賑やかな夜を過ごしていた。

彼らが片言の日本語を話すと、大半の日本人は驚いたように「上手ですね」と言う。しかし、これはあまり喜ばれない。会う日本人日本人に同じように言われて、ホトホトうんざり気味なのだ。これは数十年日本に住んでいる外国人もよく言われるので「言われたくないセリフ」のひとつであると聞いたことがある。

私は日本語教師でもあり、ひと言ふた言話すと大体彼らの日本語レベルは判る。決して「上手」とは言えない。だから、私のつたない英語で話した方がスムーズに事が済むのだが、一生懸命日本語を話そうとする彼らの気持ちがよくわかるので、ゆっくり優しい日本語で会話をするようにしている。彼らレベルにもよるが、敬語や擬音語、擬態語は極力使わず、「ですます調」で話すのが最も判りやすい。

現在世界中には二百三十万人以上の日本語学習者がいる。近年の日本アニメブームで単語レベルで日本語を知っている人はさらに多い。思っている以上に日本語は世界に浸透しているのだろう。

あと「箸が上手ですね」も禁句のひとつだ。すでに箸も世界中で使っている人が多いのだから。

2008年5月22日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.05.22 Thu

雑味

宿でゲストに出すコーヒーはオーガニックでアラビカ種ティピカと呼ばれるドミニカ共和国のコーヒー豆を使用している。焙煎の状態が一番から四番まであり、それをその日の気分でブレンドして淹れている。ゲストからも美味しいと評判であるが、最近、個人的にコーヒーを淹れる時、スーパーで買った特売のコーヒー豆を少しだけ混ぜることがある。洗練されたピュアな味わいの中に潜む「雑味」。この雑味が、そのコーヒーの味を一層引き立てているような気がしてならない。あまりにも洗練されすぎたものは、素晴らしいけど、どこか奥深さに欠けるようにも思える。でも、雑味が多すぎて台無しなる場合もある。

何においても、この「雑味」が大切なのではないかな？と思う。

食べ物や飲み物だけでなく、音楽や映画もそうだ。映画で「このシーン要らないんじゃないの？」という場面があっても、実はそれがあると無いのとでは、印象が違い面白さに欠ける場合もある。僕の場合、そういうシーンの方が印象に残っていることが多い。

それに人物もそうだ。聖人君子は素晴らしくても、ちょっと人間臭くクセの強い人の方が付き合っていて楽しい。きっと世の中もそうなのだろう。その「雑味」の塩梅が大切だったり、難しかったり。そんなもんですね。

■寄稿しようとしたが、取りやめにしたコラム

2008.07.03 Thu

旅する本

「この子、旅してるんです」と、熊本から来た女性に一冊の本を手渡された。その本を開くと、中に印刷された紙が貼ってあり、その本のシリアルナンバーが記されていた。それはアメリカで始まった「ブッククロッシング」と呼ばれる活動で、現在世界中で四百万冊以上もの本が旅をしている。本と一緒に旅をし、またその本を旅先に置いてきて、別の旅人が拾うというものだ。その本の旅の軌跡はそのホームページでシリアルナンバーを入力すると見ることができる。

僕は旅をするとき必ず本を持っていく。旅をしている時の方が家に居るときより本をよく読むし、旅先の地を舞台にした物語を読むだけで、より一層旅が楽しくなる。そして読み終えた本は荷物になるので、その宿に置いてきていた。僕が宿を始めた時から、宿には自由に持って行ってよい本があり、五年ほどしてまた宿に戻ってきたこともあった。この本はどこを旅してきたのだろうかと思案し一人ニヤニヤしたものだ。それと同じような活動があり、またもや嬉しくなった。

すでに何冊かの本が旅立っていった。それらは今どこを旅しているのだろうか？そんなことを思うとまたもやニヤニヤしてしまう。あなたも本と一緒に旅をし、読み終えた本にその旅の続きをさせてみませんか？

2008年7月3日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.07.03 Thu

ワーホリ

今、ドイツ青年が長期滞在している。彼は一年間滞在でき、仕事もできるし、語学も学べるワーキングホリデービザを利用して、日本に来ている。過去にオーストラリアやニュージーランドでそれぞれ一年間ワーホリ（ワーキングホリデー）を体験してきた。日本語ができないと、なかなか仕事にありつけない。そこで、うちのような宿でヘルパーをしているのだ。宿代分のちょっとした手伝いをしてもらっている。

単純に労働力を求めているわけではない。僕らは彼らと生活を一緒にする上で、多くの体験を得ることができる。彼は特に観光地を見て回ったりはしていない。毎日宿の仕事をし、パンを焼いたり、北海道の食材を使い独創的な料理を作ったり、日本語の勉強をしたり、マンガを見たり、訪れた旅人と会話を楽しんでいる。旅には形はない。自由な旅人がここにいる。見たり食べたり買ったりすることだけが旅ではなく、人と人の交流が旅の本当の醍醐味であると彼らは知っている。

僕もニュージーランドでワーホリを体験し、農場や宿などで働いてきた。妻と一緒にだったが、彼らは僕らを快く受け入れ、僕らは素敵な体験ができた。そういう意味でも、僕はこれからも海外から来るワーホリの旅人を受け入れたいと思っている。

2008年8月10日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.08.01 Fri

贅沢な九年間

「会う、贅沢。」

十数年前にとある百貨店で使われた広告のコピーである。まさに僕はこの贅沢を実感している。この夏も、日本国内をはじめ様々な国から旅人が来て、僕は彼らと出会った。行ったことのない町や国の人や普段全く言葉を交わさないであろう年齢層の人もいた。

旅やアウトドアが好きで宿を始めたが、北海道で一番いい時季にどこにも行けず、資金難で満足に旅に出ることすらできない自分に苛立ちを覚えることもあった。

でも、あるときふとそんな焦燥感が消えた。

今までの僕の旅を振り返ると、観光地めぐりや食を楽しむことより、いろいろな人と会い、酒を飲んだり、話をしたり、行動を共にしたりし、そして、次の土地へ、まだ見ぬ人々に会うための旅だった。

では、宿をしている今はというと、何も変わっていない。僕が移動しないだけで、多くの人々がここに訪れてくれるのだから。

「そうか、僕は今も旅を続けているんだ。」と思ったら、無理に旅に出たいという渴望はなくなった。

僕は最高に贅沢なことをしているのだ。

そんな宿もこの秋で九周年を迎える。ここで出逢えた人々に感謝しつつ、これからものんびり僕の旅をしていきたい。

2008年9月22日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.09.22 Mon

興味の違い

三〇年ほど前「私作る人、僕食べる人」というテレビコマーシャルが「男女の役割分業をより定着させる」と物議を醸し出したことがあるが、ウチではどちらかということ「僕作る人、私食べる人」である。

たとえば、レストランで美味しい料理を食べたとき、「また食べに来よう」と思う人と、「これはどうやって作ったのかな？」と思う人がいる。妻は前者で、僕は後者である。得手不得手もあるが、興味の対象が違うので、僕は作る方が合っているだけのことなのだ。

また同じようにいい音楽を聴いた時、「また聴きたいな」と思う人と「自分でも演奏してみたいな」と思う人がいる。僕は音楽は聴く専門でカラオケすらしない前者である。しかし、妻はその逆。

そんな二人が一年ほど前から、僕は蕎麦打ちを、妻はピアノを始めた。お互い未経験な分、未だに拙い感はあるが、それなりに楽しんでいる。

秋になり、宿は小休止状態。いい新蕎麦の粉が手に入り、その味を楽しんだり、妻は子供の頃からの憧れであったピアノに時間があれば向かい合っている。妻は私の蕎麦を美味しく食べてくれるし、僕も妻のピアノが上達していく様を見るのは嬉しい。誰がやらねばならぬではなく、それぞれ興味は違えども自分が楽しみ他者を楽しませることが一番であると思う。

2008年10月29日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.10.29 Wed

てま、ひま、ビール。

毎年のことながら冬になると宿は暇になる。そこで、今年はマイビール作りに参加することにした。ビール好きが約30人ほど集まって、地ビールの工房でビールを造っているのだ。

10月下旬に仕込みがはじまった。まずは3種類の麦芽を粉碎し、巨大なブルーハウス（仕込み釜）に入れる。パネルのボタン操作により水を入れたら、沸かしたり、ろ過したりするが、水量を計るのに角材を使用したり、ひもの付いた温度計をタンクの中に入れて温度を計ったりと、近代的ではあるがどこことなく現代的でないのがいい。一番搾りの麦汁は砂糖水のように甘い。この糖分を酵母がアルコールへと分解していくのだ。麦汁に青臭く苦いペレット状のホップを加え、発酵タンクへと移す。みんなでワイワイとやりながら初日の作業が夜遅く終わる。

翌日から毎日朝晩の温度と糖度のチェックを当番制でする。タンクの中で徐々に糖分はアルコールに変わり、炭酸も湧いてくる。味は甘く苦いジュースからビール味へと変わっていく。十日後、今度は低温の熟成タンクに移し、ゆっくりじっくりと時間をかけて熟成させていく。今回はそれぞれの仕事や日常の合間（隙間）に、それぞれが手と心を尽くし、みんなで作っている。手間隙を惜しまずかけたマイビールがまもなく完成する。

2008年12月11日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2008.12.11 Thu

灯

一杯のコップの水を、他の人のコップに分けていくと、水の量は減ってしまう。ところが、キャンドルからキャンドルへ火をつけても、明るさが減ることはない。灯が二つになるだけだ。

当たり前のことではあるが、自分から差し出したものが、減らずにそのまま伝わり、増えていくというのは、案外少ないのではないだろうか、スノーキャンドルを作りながら思った。

今年もろうそくの灯で雪の小樽の街を照らす「小樽雪あかりの路」が十五日まで開催中だ。

市内はもちろん国内外から集まった多くのボランティアによってキャンドルがともされた小樽運河や旧手宮線の会場には連日、多くの人々が訪れている。

メイン会場もいいが、個人的には一般家庭の玄関先にひっそりとともされる小さなスノーキャンドルが好きだ。

町おこしのイベントは、いかんせん観光客向けになりがちだが、イベントは、そこに住んでいる人々が楽しんでこそそのものだ。

だから、まず自分たちが楽しみ、その灯を通りすがりの人に分け与える家庭のスノーキャンドルが、雪あかりの路の本流なのだと思う。

ボランティアや人々の思いを包んだキャンドルの灯が、今後も減ることなく、次々とともされていってほしい。

難しきことを面白く

「日本語って難しいですね」と外国人に言う日本人がいる。自分が話している言葉が本当に難しいのであろうか？

僕は日本語を教え始めてかれこれ十年になる。日本語教師の資格を取ってから数年日本語学校で留学生に教えていた。今は宿の仕事の合間で日本語の個人レッスンをしている。生徒は現在5名ほど。市内に住んでいる外国人もいれば、隣町から通ってくる人もいる。上達の早い人もいれば、ゆっくりの人もいる。会話主体や日本語検定など目的もさまざまだ。もう二十年以上日本にて会話には問題ないが、読み書きがほとんどできない人もいる。

授業で学習者は「難しい」と口にするが、僕は決して「日本語は難しい」とは言わない。学習意欲を損ねかねない。だからといって「簡単」とも言わない。実際に簡単ではないから。「難しい」と頭を抱える彼らに僕は「面白いでしょ」と言うようにしている。「難しい」ところも「面白い」と思えるように、できる限り分かり易い例えをあげて教えるようにしている。「難しい」部分をうまく説明できたときは実に楽しい気分になる。

実際に難しいのは「習う」ことではなく「教える」方なのかもしれない。でも、教える人が「難しい」と手を挙げてはいけない。そこにこそ面白さを見出したいものだ。

2009年3月13日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2009.03.13 Fri

春告魚

今年はニシンが豊漁とのニュースを何度も見る。約六十年ぶりに小樽の海岸でもニシンの産卵により海が乳白濁色に染まる群来が見られた。もちろん私は昔の群来を見たことはないので、生まれて初めて目にする光景だ。しかしながら、今年は豊漁といっても、最もニシンが捕れたときは今年の約五百十倍の漁獲高というから、そのすさまじさは想像だにできない。海岸がニシンで盛り上がりその上を歩いたなんて話も聞く。

先日、大正九年に作られた黒輪島塗のお膳でニシン料理をいただく機会に巡り会えた。昔ニシン漁で栄えた網元の屋敷で使われていた何十脚ものお膳を蔵の中で発見し、忘れられ埃まみれになっていたものをもう一度活用しようという試みである。幸運にも保存状態がよかった。現在同じ物を作ろうとすると一人分のお膳セットは三百万円もかかるとのことだ。初めて目にする高級お膳に旬のニシン料理が並べられ、つつい緊張してしまっただが、酒が進むに従って、会話にもはずみ鯨や当時の北海道の話に耳を傾け楽しく美味しく勉強になるひとときを過ごした。

ニシンは漢字で「春告魚」とも書く。昔のような大漁でないにしても、このニシンの群来の再来が、北海道の春を告げる風物詩として再び定着して欲しいものだ。

2009年4月24日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2009.04.24 Fri

カナヅチでトンカントンカンとしていて、ふと思った。「これは秘密基地だな」と。

いま築五十年ぐらいの古い家を自分で直している。「ここに窓を作ろう。床は板張りにしよう。」と、図面もなく思いつきのままりフォームしている。ただし、あまりお金をかけられないので、古材を使い、中古品を探し、できる限り今あるものを有効利用している。

子供の頃に作った秘密基地は空き地の土管や立ち木をそのまま使い、あとの材料はその辺から拾ってきたり、家からこっそり持ってきたりと、子供ながら知恵を絞っていた。どう考えても、今やっていることもそれほど変わらない。

新しい家を造るのではなく、古い家を直して使うことは、まるで考古学のように、以前住んでいた人はこの部屋はどう使っていたのだろうか？この壁はどう作られているのだろうか？床下には何が？などと想像が膨らむ。実に楽しい遊びだ。

ただ、子供の時のようにひと夏で忘れ去られ、朽ちていく秘密基地では困るので、ある程度耐久性と快適さがある住空間にしなければならない。

古いから、不便だからといって新しく買い換えたりしないで、できる限り自分で直し、歴史を感じ、親しみを持って、長く使うことが僕は好きである。

2009年6月3日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

ボツにした最初の原稿・・・

再利用

地デジ対応テレビやエコ家電、エコカー、エコ住宅と買い換えを迫られている気がしてならない。どうもエコという名を利用した景気対策ようにも思える。

ニュージーランドにいた頃、よく見かけたのはセカンドハンドショップ。いわゆるリサイクルショップだ。日本のとは比べモノにならないぐらい、商品の質は悪いが、ありとあらゆるものがあつた。廃車から取った車の部品から、家のドアや窓、さびた釘やベッドのスプリング、映るどうかかわからないテレビや型の古い家電など。それらは店だけでなく毎週末開かれるフリーマーケットなどでも買うことができた。そして、そういった中古品で車を直したり、家を建てる人も少なくなかった。

今僕は築50年以上の古い一軒家を自分の住居用にと自分で直している。リフォームにあまりお金をかけられないので、中古品を探すが、ニュージーランドのように簡単には見つからない。あつたとしても中古品の割には高いこともある。仕方がないので、手元にあるものや古い家から取り外したものを、新しく買って来たものを使い作業することにした。古いからといって簡単に買い換えたりしないで、できる限り自分で直し、親しみを持って、長く使うことが、僕には性に合っ

ている。

2009.06.03 Wed

群来蕎麦

私のそば打ちの師匠が考案してくれた「群来（くき）蕎麦（そば）」を、うちで初めて作ってみたのは3月のことだ。往時ほどではないが、小樽にたくさんのニシンが戻って来るようになったのが、きっかけだった。

素人ながら腕前はプロにも引けを取らない師匠が考案したのは、「ニシンそば」のアレンジで、ニシンの産卵で海が乳白色に染まる「群来」を、すりおろしたヤマイモで表現した。ニシンの甘露煮ととろろが思いのほかマッチして、実においしかった。

その後、小樽産のニシン、ヤマイモ、水を使って試作を繰り返した。現在、ソバも育てている。秋には、そのソバ粉で打つことができる。小樽の山と海の幸を水でつなぐ群来蕎麦。作って楽しみ、食べて喜びたい。

先月、有志が集まり、ニシンをコンセプトに小樽の魅力を発信しようとして「鯨（にしん）プロジェクト」を発足させた。ニシンを通して自然環境を考え、歴史と文化の伝承、地元の食材の発掘と紹介などをしながら、地域と人々との輪を形成していこうと考えている。

その初回に「群来蕎麦を楽しむ夕べ」と称してお披露目会を行った。群来蕎麦は好評で、ニシンをテーマに大いに語らうことができた。いつの日か「群来蕎麦」を、小樽を代表するそばにしたいと思う。

2009年7月13日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

2009.07.13 Mon

海からの賜り物

「小樽の港に行きましたか？」と聞くと、かなりの確率で「いいえ」と答える旅人が多い。小樽に来て、運河までは行くものの、そこから先にある港には行かないのだ。海も車窓から見るだけで、終わってしまうことも多い。

小樽は港町であり、海のある町だ。市内には9つもの海水浴場がある町はそう他にはない。寿司にしろ、運河にしろ、浮き玉から発展したガラス工芸にしろ、元は海に由来している。海があるからこそ、小樽という町があるのだ。

そんな小樽でもっと海を楽しんでもらおうと、小樽運河クルーズが始まった。私も何度か乗せてもらったが、水面から見る小樽運河や港は格別な趣があり素晴らしい。

また、今月23日は貯木場の跡地を利用して、いかだレースが開催される。制限時間内に決められた材料だけでいかだを作り、その後タイムレースが行われる。私は旅人を伴って過去2回出場しているが、実に愉快的な大会だ。

さらに、海の情報サロンの開設や子供向けの海の体験学習、アクアスロン（水泳とランニング）など、楽しい海のプロジェクトが企画実行されている。

海から元気をもらい、心もカラダも町も笑顔になっていくような気がする。そんな小樽の海へ来ませんか？

2009年8月18日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

これは校正前の原稿で、新聞掲載とはちょっと違います。タイトルも掲載時には「小樽の海」となっています。

2009.08.18 Tue

「今日もたくさんの方がここを旅立っていきましたね。」と、一週間ほど宿を手伝ってくれている東京から来た女子大生が寂しそうに言った。昨夜知り合って楽しく談笑し、共に同じ部屋で寝ていた人が今日はいない。そして、また新しい人がやって来る。

「まるで学校だね。入学と卒業の繰り返しだ。」先生は学校に残り、学生は出て行き入れ替わる。毎年の様に会いに来てくれる人もいるが、二度と会わない人もいる。

ときどき昔を思い返す。あの先生は元気だろうか？あの教室から眺めていた町並みは今もあるだろうか？隣の席のあの子はどうしただろうか？あの銀杏はそろそろ色付いたのだろうか？

記憶の片隅に残る映像は少しずつ色褪せていくが、今も同じように学校があるとそこはかたなく嬉しい。

年年歳歳花相似

歳歳年年人不同

年々変化していくだろうが、この町もこの宿も変わらず同じようにここにあり続けたい。

宿を始めてちょうど10年経った。はじめのころに来た旅人は今のこの町やこの宿をどう見るのだろうか？

のんびりと旅していきましょう。ゆっくりと暮らしていきましょう。

年年歳歳宿相似

歳歳年年旅人不同

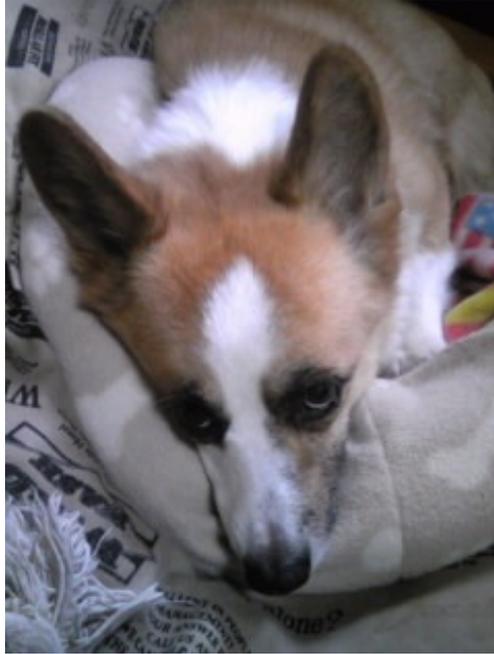
2009年10月11日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

これは校正前の原稿で、新聞掲載とはちょっと違います。

2009.10.11 Sun

犬を飼う

今朝の北海道新聞「朝の食卓」にコラムが掲載されました。



僕と妻の間にはいつも犬がいる。

彼女（犬）と出逢ったのは、宿を始める2年前。生後2ヶ月にもなっていない子犬だった。元気に走り回る彼女を僕らは愛し世話をした。遊び、叱り、かわいがり、しつけをした。

1才の時、古民家へ引越。2才の時、宿をオープン。3才の時、お嬢さんにと子犬を連れてきたが、世話好きの彼女は、お嫁さんではなく、母親になってしまった。4才の時から、宿が忙しくなる。犬たちが目的で来る旅人も現れはじめた。

朝夕の散歩が好きで、雨が降ろうが雪が降ろうが欠かしたことはない。お客さんが来ると元気いっぱい吠える。皆ちょっとビックリするが、彼女らなりに精一杯の歓迎の挨拶をしてくるのだ。たくさんの旅人にかわいがられ、写真を撮られた。

7才の時、乳癌手術をした。食事がシニア食になったが、相変わらず元気だった。

今年、宿と共に歩んできた彼女も12才になった。乳癌手術は4回もし、白内障や不整脈もある。後ろ足の関節が悪く、ふらつき足を引きずるようになった。

それでも散歩は辞めない。それでも歓迎の挨拶は辞めない。それでも彼女は僕らに大切なものを与えてくれている。

そして、今日も僕と妻の間には犬たちがいる。（旅の宿経営・小樽）

2009年11月16日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

今日（2009.11.16）の北海道新聞朝刊「朝の食卓」に掲載されたコラムの校正前の原稿です。新聞掲載とはちょっと違います。タイトルも掲載時には「犬」となっています。

さて、この「朝の食卓」ですが、この12月で2年の契約が切れます。2010年から約半数が新しい人になります。こういった入れ替えは大歓迎で、新しい人が加わり、僕も楽しみです。

後志版の「えぞふじ」から数えて、約3年間、北海道新聞に「書く」という機会を与えていただいたことに感謝しています。

ま、あと1回あります。

大切に書かせていただきます。

2009.11.16 Mon

「遠い太鼓に誘われて私は長い旅に出た」

村上春樹著「遠い太鼓」の冒頭に記されているトルコの古い歌がある。

韓国からの旅人が韓国語に翻訳されたその本を持っていて、久し振りに僕も読み直してみた。

僕が遠い太鼓の音が気になりだし、旅に出たのは18の時である。もう四半世紀も前のことだ。自分捜しの旅とか、出会いを求めてとか、ここじゃないどこかへ行こうとか、そんな哲学的な話ではない。どちらかという、物理学的であり、力学的であった。

ひたすら南へ。地図で言うなら「下へ！」自由落下のような旅だった。

18の世間知らずで恥知らずが、旅をして、いろんな町を見た。いろんな人に逢った。いろんなものを食べ飲んだ。そして、いろいろなことを知ろうとした。貪欲な旅だった。

デジカメもなければ、パソコンも、ケータイもない時代だった。カメラは持っていたものの、フィルムが買えなかった。記憶はデータではなく胸に刻まれた。でも、いつしかそれも色褪せていき、消えていく。なんかそれでいいような気がする。

本の最後に「そして僕は何処にでも行けるし、何処にも行けないのだ。」とある。

未だ僕の中で太鼓が響いている。今でもぼくは旅をしている。この場所で。（旅の宿経営・小樽）

2009年12月26日 北海道新聞（朝刊）「朝の食卓」より

今日（2009.12.26）の北海道新聞朝刊「朝の食卓」に掲載されたコラムの校正前の原稿です。

これで最終回です。ありがとうございました。

2009.12.26 Sat

10月頃から徐々に宿は暇になってきて、12月1月は、旅人のいない日の方が多くなる。

年末年始は宿泊業界の書き入れ時のひとつらしいが、私の宿は正直言って暇です。クリスマスやお正月などはどちらかといえば、カップルや家族のイベントなので、そんな時季に一人旅はしたくないのかもしれない。それでも、一人旅をするへそ曲がりはあるのもで、そんな旅人とのんびり酒を呑むのも楽しい。

そんな風に徐々にスピードを緩め、ギヤも落として、そろそろと徐行運転状態になっていたのに、2月になると、一気にアクセル全開で走ることになる。

それは「雪まつり」である。

夏は、6月頃から徐々に忙しくなるのに、この雪まつりシーズンは、一気に来る。それまで連日誰もいなかった宿が、満室状態。ギヤチェンジもする暇なく、走り回り、約2週間でパタリと止まる。

やっと、終息を迎えてきた。また、静かな日々が来る。そして雪解けの季節になっていく。

もう、春が隣まで来ているのだ。

2010年2月21日 杜の樹にて

昨年まで、北海道新聞朝刊「朝の食卓」に約月1回コラムを書かせていただいていた

。

不定期ではあるが、そんな感じで文章を書きたいと思い立って、はじめてみました。

月に1回ぐらいの割合で書ければと思っていますが、あくまでも不定期です。あらかじめ言い訳を・・・

2010.02.21 Sun